

私と汝

一

私は現在私が何を考へ、何を思ふかを知るのみならず、昨日何を考へ、何を思ふたかをも直ぐに想起することができる。昨日の我と今日の我とは直接に結合すると考へられるのである。之に反し、私は他人が何を考へ、何を思ふかを知ることはできない。他人と私とは言語とか文字とかいう如き所謂表現を通じて相理解するのである。私と汝とは直に結合することはできない、唯外界を通じて相結合すると考へられるのである。我々は身體によつて物の世界に属し、音とか形とかいう物體現象を手段として相理解すると考へられるのである。併し物體界とは如何なるものであるか。物體界といふものも、我々の經驗的内容と考へるものを時間、空間、因果の如き形式によつて統一したものと考へることができる。内界と外界といふものが本來相對立したものでなく、一つの世界の両面といふ如きものに過ぎない。両界は同じ材料から構成せられて居るのである。すべて實在的なものは時に於てある

6-342

と考へられ、時は實在の根本的形式と考へられる。内界と考へられるものも、外界と考へられるものも、それが實在的と考へられるかぎり、時の形式に當嵌つたものと考へられねばならぬ。然るに、時は現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。而して現在が現在自身を限定するといふことから時が限定せられるといふことは、時は永遠の今の自己限定として考へられるといふことを意味してみなければならない。時は永遠の今の自己限定として至る所に消え、至る所に生れるのである。故に時は各の瞬間に於て永遠の今に接するのである。時は一瞬一瞬に消え、一瞬一瞬に生れると云つてよい。非連續の連續として時といふものが考へられるのである。時といふものが斯くして考へられると考へるとするならば、時は各の瞬間に於て二つの意味に於て永遠の今に接すると考へる事ができる。永遠の今と考へられるものは、一面に於ては絶対に時を否定する死の面と考へられると共に、一面に於ては絶対に時を肯定する生の面と考へられねばならない。時の限定の背後に永遠の死の面といふものを置いて考へる時、永遠なる物體の世界といふものが考へられ、その背後に永遠の生の面といふものを置いて考へる時、永遠なる精神の世界といふものが考へられるのである。内界と外界とは時の辯證法的限定の両方向に考へられる、永遠の今の両面に過ぎない。すべて具體的に有るものは辯證法的に自己自身を限定する、即ち時間的に自己自身を限定するのである。時に内外の別があるのではなく、時は固一つでなければならぬ。眞の時は歴史時といふべきものであり、具體的な實在

界は歴史的と考へることもできるであらう。かゝる世界が辯證法的に自己自身を限定するに當り、その兩方向に抽象的な二つの世界が考へられるのである。我々の意識現象と考へられるものが朝から晩まで種々に變化するに關らず、一つの内面的統一を保つと考へられるのみならず、昨日の我と今日の我とは直接に結合すると考へられ、そこに我々の内界といふものが考へられる。併しかゝる内面的統一といふものが成立するには、既に表現的限定の意義がなければならない。我々の意識の統一と考へられるものは、一面に於て實在的連續と考へられると共に、一面に於て意味的結合でなければならない、意識現象に於ては意味即實在と考へられるのである。かゝる結合に於ては、一々の點が自己自身を表現するものでなければならない。表現するものと表現せられるものと一であるといふことが、意識統一の眞の意義と考へることもできる。私と私とが心の内にて話し合うのである。眞の時といふべきものは、單なる連續として考へられるのではなく、上に云つた如く非連續の連續として考へられるのでなければならぬ。而してかゝる時の連續と考へられるものは限定するものなきものの限定として、表現的限定の意義を有つてゐなければならぬ。昨日の私と今日の私とは、私と汝との如く共に表現の世界に於てあるのである。

個物といふものは如何にして考へられるのであるか。個物といふものが考へられるには、まず何等かの意味に於て一般者の限定といふものが考へられねばならない。個物はかゝる限定の極限として考

へられるのである。個物は何處までも限定せられたものでなければならぬ。限定せられない個物といふものはない。併しかゝる意味の限定に於ては何處までも個物に達することはできず、單にかゝる意味に於て限定せられたものは眞の個物ではない。個物は自己自身を限定するものでなければならぬ。個物的なるものの自己限定によつて判断が成立すると考へられる如く、個物は一般者を限定するといふ意味を有つてゐなければならぬ。個物と一般者との間には辯證法的限定といふ如き意味がなければならぬ。かゝる意味に於て個物が限定せられると云ふには、有の一般者の限定として考へられるのではなく、限定するものなきものの限定として無の一般者の限定として考へられねばならない。無の一般者の限定といふのは單に限定するものがないといふ意味ではない。有るものは何かに於てあると考へられる如く、物は環境を有つと考へられねばならない。而もかゝる環境は無限に廣く無限に深く考へられるものでなければならない。物がその環境から限定せられると考へられるかぎり、それは有の一般者の限定と考へられるものであり、何處までも眞の個物といふものは考へられない。唯、例といふ如きものがあるのみである。物と環境との間に所謂合理的關係といふ如きものが考へられるかぎり、個物といふものは考へられない。個物は環境に包まれ何處までも環境から限定せられるといふ意味を有すると共に何處までも環境から限定せられないものであり、却つて環境を限定する意味を有つたものでなければならない。環境は個物に對して單にその働きの場所といふ如き意味を有つてゐなければ

ならない。如何に大きく深く環境を考へて行つても、單に環境から限定せられると考へられるかぎり、個物といふものは考へられない。かゝる意味に於ての環境を越えた環境に於て、自己自身を限定し行く個物といふものが考へられるのである。故に個物と環境との間は互に非合理的と考へられる、個物に對して環境は偶然的と考へられ、環境に對して個物は偶然的と考へられる。斯くして同一の環境に對して自由に自己自身を限定し行く無数の個物が考へられるのである。而も環境と個物とは固、無関係ではない。環境なくして個物といふものもなければ、個物なくして環境といふものもない。時の限定に於ても、瞬間といふものが限定せられるには、何等かの意味に於て限定せられた現在から出立せなければならぬ。かゝる現在の限定の極限として、瞬間といふものが考へられるのである。而もかゝる意味の限定に於ては、眞の現在、即ち瞬間は掴むことのできないものであり、現在のない時は眞の時ではない。時は現在が現在自身を限定するといふことから考へられねばならぬ。而してかゝる意味に於て眞の時といふものが考へられるには、嚮に環境的と考へられた現在は永遠の今といふ意味を有つたものでなければならぬ。斯く超越的環境の意味を有つた永遠の今の自己限定として、之に於て、無数に自己自身を限定する現在といふものが考へられるのである。かゝる意味に於て環境と考へられるものは、死の面ではなくして生の面でなければならぬ。無の一般者の限定として個物と環境との相互限定と考へられるものは、生命の流といふ如き意味を有つたものでなければならぬ。環

境が個物を生み、個物が環境を変じて行くといふ個物と環境との関係は生命と考へられるものでなければならぬ。非合理的なるものの合理化として辯證法的と考へられるものは、その根柢に於て生命と考へられるものでなければならぬ。ヘーゲルの辯證法はノエマ的であつたと云ひ得る。従つて辯證法が唯、過程的に考へられたと云ひ得るであらう。併し眞の辯證法はかゝる意味に於て考へられるものでない。かゝる意味に於て辯證法といふものが考へられるならば、それは何處までも連續的發展の意義を脱することはできない。絶對の死より生きるといふ眞の辯證法的意義は出て來ない。眞の辯證法といふものが考へられるには、物が環境に於てあり、環境が物を限定し、物が環境を限定するといふ考から出立せなければならぬ、即ち場所的限定の立場から出立せなければならぬ。物が何等かの意味に於て環境に含まれて居ると考へられるかぎり、辯證法的運動といふものは考へられない。眞の辯證法的運動といふものが考へられるには、物が絶對に環境から死し去らねばならぬ。物と環境との間には何らの作用的関係もなくならねばならぬ。環境は物に對して單なる場所といふ如き意味を有たねばならぬ。物と環境とは互に偶然的でなければならぬ。而もかゝる死の面が即ち生の面であるといふ所に、限定するものなきものの限定として眞の辯證法的運動が考へられるのである。絶對の否定が即肯定である眞の辯證法といふものが考へられるには此の如き場所的限定の意義がなければならぬ。斯くして環境が個物を限定し、個物が環境を限定するといふ辯證法的過程が考へられ、場所的限定の

意義に於て偶然的なる無数の個物といふものが考へられるのである。概念の外延的關係といふ如きものは此に基づくと考へねばならぬ。單に主語的なものについて、有即無として過程的に考へ行く時、眞の辯證法的運動といふものは成立しない。眞の辯證法的運動といふものが考へられるには、場所的切断がなければならない。故に眞の辯證法的過程は物と環境との間に考へられるのである。例えば、成が既成在として定有となると云ふにも、私の所謂場所的限定の意味がなければならないと考へるのである。特に場所的限定の意義なくして質より量の出て來やうがない。辯證法的運動は物が場所に於てあるといふことから始まらなければならない。私はかういふ意味に於て、有るものは何かに於てあるといふプラトンのパルメニデスに於てかゝる辯證法的運動の發端が含まれて居るではないかと思ふのである。

私と汝との關係について種々なる難問は、内界と外界とが對立し、各自が絶對的に自己自身に固有なる内界を有つと考へるから起るのであると云ふことができる。我々が嚴密なる意味に於て個人的自己の意識といふものから出立するならば、遂に獨我論に陥るの外ない。併し個人は個人自身によつて生れるのではない。もし個人が絶對ならば個人といふものもない。個人といふものが生れるには、個人が生れる地盤がなければならない。即ちその環境といふものがなければならない。個物は何處までも環境から限定せられたものでなければならない。而も環境を限定する所に個物といふものがあるの

である。而して斯く環境が場所的限定として之によつて個物が限定せられると考へる時、右に云つた如くそこに無数の個物が考へられるのである。私を私として限定するものは、汝を汝として限定するものであり、私と汝とは同じ環境から生れ、同じ一般者の外延として之に於てあるといふ意味を有つと云ふことができる。發生的に考へても、我々の自己は個人から始まるのではない。多くの原始民族に於て見られる如く共同意識から始まるのである。個人は社会から生れると云つてよい。如何なる意味に於て個人的意識に先立つて社会的意識といふものが考へられ、更に如何にして物體界から意識の世界が生れると考へられるであらうか。すべて有るものは時に於てあるのであり、具體的に有るものはすべて歴史的と云ふべく、單なる物質の世界といふものはない。主觀を離れた單なる客觀界といふものがあるのではない。宇宙進化論的に考へれば、意識現象も物質から出て來ると考へなければならぬかも知らぬが、それはデュ・ボアレモンの云つた様に世界の不可思議の一でなければならぬ。物質の世界といふものが我々の自己を生む環境となるのではなく、私の所謂「於てあるもの」と環境との間には特殊と一般との關係がなければならぬ。單なる物質の世界と考へられるものは、我々の自己に對して環境の意味を有つものでない。唯、時といふものが考へられるには、上に云つた如く何等かの意味に於て限定せられた現在から出立せなければならない。かゝる現在の自己限定の極限として瞬間といふものが考へられ、逆に瞬間が瞬間自身を限定するといふ意味に於て、眞の時といふものが考へ

られるのである。即ち限定せられた現在といふものが、いつも私の所謂環境といふ意味を有つたものでなければならない。かゝる意味に於て何處までも限定せられた現在、永遠に限定せられた今といふものが、すべてのものがそれによつて限定せられ、それから生ずると考へられる環境と考へることができる。かゝるものをすべてのものの環境と考へられる物體界と考へることができるであらう。我々がすべての實在の根柢として考へる物體界といふものは、かゝる意味に於て何處までも限定せられた現在の世界でなければならぬ。それに於ては瞬間といふものはない、自己自身の中心を有さない時の世界、即ち空間的時の世界といふべきである。すなはち所謂物質界と考へられるものが無の限定として現在が現在自身を限定する意味を有し、既に歴史的世界といふ意味を有することによつて、それからすべてのものが發展すると考へられるのである。それは既に辯證法的意義を有つたものでなければならない、生きたものでなければならない。限定せられた現在の自己限定、即ち有の一般者の自己限定として時といふものが考へられる時、何處までも過去から現在が限定せられると考へられるが、逆に限定するものなくして自己自身を限定する瞬間の自己限定から時が始まるといふ立場から見れば、終のものは始にあると云ふことができる。時は未來から限定せられると考へることができる、眞の生命と考へられるものは一面に於て未來から過去への逆流と考へることもできる。唯物論者は脳髓が出來たから意識が生じたと考へるが、却つてベルグソンの如く我々の感官といふ如きものはエラン・ヴ

ィタールが物質界を貫通した跡方と考へることができる、視力の流の跡に眼といふものが出來たと考へることができる。視力的生命との關係に於てでなければ眼といふものは理解せられない、然らざれば單に細胞の偶然的なる結合と考へる外ないであらう。本當は我々の世界と考へるものは、瞬間が瞬間自身を限定することから始まると云ふことができる。瞬間が瞬間自身を限定するといふことは、單に何物もない所から忽然、物が出て來るといふことではなく、そこにも環境が個物を限定し、個物が環境を限定するといふ意味がなければならぬ。點から點に移り行く眞の個物と考へられるものは此の如き辯證法的過程として考へられるのである、一方に於て自己が過去の過去から限定せられるとも考へられると共に、一方に於て自己は未來の未來から自己を限定する意味を有つてゐなければならない。過去もなく未來もなく、到る所が今であり、到る所に時が始まる永遠の今の自己限定として世界が始まると云ふことができる。而してかゝる限定が我々の人格的生命と考へられるものであり、我々の世界は人格的生命の自己限定から始まると考へることもできるであらう。我々の個人的自己の環境と考へられる社会的意識と考へられるものも、かゝる意味に於て永遠の今の意味を有つたものでなければならない。而して世界の根柢として考へられる物質界と考へられるものは、社会的意識の身體といふ如き意味を有つたものでなければならぬ。

限定するものなきものの限定として辯證法的運動と考へられるものが、右の如く環境が「於てある

もの」を限定し、逆に「於てあるもの」が環境を限定するといふことであり、環境といふものがかゝる限定に欠くべからざる一面であるとするれば、私は之によつて我々の意識と考へるものが如何にして生じ、如何なる意味を有するものなるかを明にすることができると思ふ。物は環境に於てあり、個物は環境的限定の極限として考へられねばならぬ。而も單にかゝる意味に於て個物といふものが考へられるのでなく、逆に個物が環境を限定するといふ意味がなければならぬ。かゝる逆限定といふものが考へられるかぎり、そこに中和的環境といふものが考へられねばならない、過程的限定を離れた單なる場所的限定といふ如きものを考へることができる。辯證法的限定といふものを、唯、過程的に考へるならば、單に否定即肯定、死即生といふ如きことにて足るであらう。併しかゝる意味に於ての辯證法と考へられるものは尚主語的有に即したものと云ふべく、連續を基として考へられた非連續の連續たるを免れない、眞に絶對否定を基とした辯證法ではない。従つてかゝる辯證法に於ては、分離的なものを考へることはできぬ。眞の辯證法といふのは、始より蘇生を期待して死するのではなく、眞に死することによつて生きるといふことでなければならぬ、絶對の死に入ることによつて蘇るといふことでなければならぬ。「於てあるもの」に對して、場所的限定といふものが對立的意義を有つてゐなければならぬ。かゝる意味に於て何處までも環境から限定せられ行くと考へられる個物が、その極限に於て之を越えると考へられる時、場所的限定と考へられるものは、單に個物的過程を映す我々の意

識面といふ如き意味を有つと考へることができるのである。個物が環境を越えると考へられる時、場所的限定が之につれて消え失せるのではない、場所的限定は何處までも之に對して逆限定の意味を有たなければならぬ。而もそれはもはや之を限定するといふ意味を有つことはできない、單に之を映すといふの外ないのである。斯くして實在界を離れた浮泛的な映像の世界といふ如きものが考へられるのである。時間的なものに對して非時間的なものの世界と考へられるものは、かゝる意味を有つたものでなければならぬ。併しかゝる世界といへども、全然、個物が個物自身を限定するといふ意味を失つたものではない、單に一般的なる場所的限定の世界ではない。苟もそれが有ると考へられるかぎり、一般が個物を限定し、個物が一般を限定する辯證法的限定の意義を有つてゐなければならぬ。意識は誰かの意識でなければならぬ、何人の意識でもない意識といふものは考へられない、各人が各人の意識面を有つのである。環境的限定の極限に於て個物が之を越えるといふ時、即ち個物が場所に對して自由となると考へられる時、無の限定の立場に於て之に對する逆限定として、即ち個物が個物自身を限定するといふ意味に於て、無数の個物的限定といふものが考へられねばならぬ。併し場所が何處までも環境的限定の意義を有つと考へられる時、自己自身を限定する個物と考へられるものは、單に映すもの、單に各自の意識面を有つものと考へる外ない。我々の自己は此場合、全然受働的と考へられるのである、單に環境を映すもの、即ち感官と考へられるのである。我々の内部知覺的

世界と考へられるものは斯くして考へられるのである。環境的限定を離れて各自が各自の内的世界を有つと考へられるのである、單なる環境的場所の自己限定として我々の感覺的意識の世界といふ如きものが考へられるのである。併し意識の世界といえども、右に云つた如く實在界を離れて浮遊するのではない、受働も一種の作用でなければならぬ。我々は限定せられた一般者の自己限定として個物といふものを考へて行く時、その限定の極限に於て之を越えると考へなければならぬ。併し私の所謂環境的限定の意味はそこに止まるのではない、何處までもその意味がなければならぬ。上に云つた如く、すべてのものが物質界から生ずると考へられる時、その物質界と考へられるものは、時間的として既に無の限定の意味を有つてゐなければならぬ。斯くして始めて物質の辯證法的運動といふことが理解せられ、物質から意識が生ずるといふ如きことも云ひ得るのである。單なる物質界と考へられるものは、唯、環境的限定の極限に考へられた抽象面たるに過ぎない。眞の物質と考へられるものは、固、歴史的物質でなければならぬ。具體的に有るものは、始から無の限定として、環境が個物を限定し個物が環境を限定するといふ辯證法的運動としてあるのである。かゝる辯證法的運動と考へられるものが、連續的過程としてでなく、絶對否定によつて非連續の連續として考へられねばならぬのであるから、かゝる過程の一面として意識といふ如きものが考へられるのである。意識から物質は出ないが、物質から意識がでると考へることもできぬ。個人的意識を生むと考へられる歴史的物質は、固、

6-354

辯證法的として始から意識面を有つたものでなければならぬ。環境的限定の極限として個物といふものが考へられるといふ代りに、個物が個物自身を限定することによつて環境が限定せられるといふ立場から云へば、物質界といふ如きものは、個物的限定の極限に於て、その逆限定として考へられるのである。個物の自己限定の極限に於て絶對の否定面に撞着すると考へられる所に、物質界といふものが考へられねばならぬ。故にギリシャ哲學に於ての様に、物質は單なる無と考へられ、又單に映す鏡とも考へられるのである。意識界と考へられるものが一面に於て物質界であり、物質界と考へられるものが、一面に於て意識界であるとも云ふことができる。個物が個物自身を限定するといふ意味に於て具體的に有ると考へられるものが行為するものといふ如きものであり、行為するものが個物的に自己自身を限定するといふ意味に於て、自己限定面と考へられるものがその意識面といふものであり、更に之を越えた環境的限定面と考へられるものが物質界と考へられるものである。而して絶對の死の面は即生の面なるが故に、行為的自己として我々の於てある世界といふ如きものは、一面に於て何處までも物質的と考へられると共に、一面に於て何處までも意識的として表現的世界の意義を有つと云ふことができる。我々の於てある世界といふものは環境的限定としては物質の世界、生物の世界といふべく、個物的限定の立場に於ては歴史的な世界と考へることができるであらう。單なる環境的限定の立場から何處までも環境を越え行く個物を限定しようとする時、環境的限定は物質的、生物的として

宇宙的生命の意味を有たなければならぬが、自己自身を限定することによつて環境を限定する意味を有する動く個物を限定する環境的限定と考へられるものは、歴史的と言わねばならぬ。

以上述べた如く、何等かの環境なくして個物といふものなく、我々は何等かの環境に於てあり、環境が我々を限定すると共に、我々が環境を限定する。環境なくして個物がないと共に、個物なくして環境といふものもない。かゝる過程的限定の根柢に何處までも單なる環境的限定といふものを置いて考へれば、物質界の自己限定といふ如きものが考へられ、それが何處までも我々の個人的自己を限定するといふ意味に於ては、宇宙的生命と考へることもできるであらう。併しすべて時に於てあるものは既に無の限定の意義を有し、かゝる辯證法的運動も、固、死即生なる絶對無の限定面的限定として考へられるのであり、具體的にはかゝる環境的限定といふのも社会的限定といふ如き意味を有し、歴史的に自己自身を限定して行くと云ふことができる。かういふ意味に於ては、單なる物質界と考へられるものも歴史の世界、表現の世界の一面といふことができる。唯、かゝる辯證法的限定の底には、絶對に死して生れるといふ絶對面に撞着するといふ意味があり、そこに自己自身を限定する眞の個人的自己といふものが考へられるのである。單なる環境的限定としての物質界といふものも、そこから考へられるのである。個人的自己に對し絶對的否定面として物質界といふものが考へられるのである。

かういふ意味に於て、物質といふものを所謂物質といふ意味ではなく、絶對の非合理性を意味するとすれば、表現的限定の底に物質といふものを置くこともできるであらう。社会的・歴史的限定の極限として考へられる我々が、死即生の絶對面に撞着すると考へられる時、絶對に非合理的なるものと云ふべき物質ともいふ如きものに撞着すると共に、我々は限定せられた環境的限定を脱して、各人が各人の意識面を有つといふことができるのである。そしてそこから個物が環境を限定し、我々は歴史的に我々の社会を変じ行くと考へることができる。社会的・歴史的限定の極限として考へられる我々の個人的自己は、逆に歴史を限定し、社会を改造する創造的意義を有つのである。社会は自己自身の限定の尖端と考へられる個人的自己の自己限定を通じて動くのである。偉人といふ如きものは社会的意識の焦點と考へることができるのである。

私は是に於て眞の生命の過程といふものを明にしておかねばならぬ。眞の生命といふべきものは、ベルグソンの創造的進化といふ如き單に連續的な内的發展ではなくして、非連續の連續でなければならぬ。死して生れるといふことでなければならぬ。生命の飛躍は斷續的でなければならぬ。ベルグソンの生命には眞の死といふものはない。故に彼の哲學に於て空間的限定の根柢が明でない。眞の生命といふのは、唯私の所謂死即生なる絶對面の自己限定としてのみ考へ得るものでなければならぬ。眞に限定するものなきものの自己限定としてのみ考へ得るのである。然らざれば、何處迄も對象的限

定の意義を脱することはできない。我々は我々の個人的自己の自己限定の底に於て、絶対の無に撞着するのである、明日の我として蘇るものを越えて、再び自己として蘇らないもの、唯、他人として蘇るものに撞着するのである。そこに絶対に非合理的にして合理的なるものを生む眞の物質といふ如きものも考へられるであらう、永遠に死して生れないもの、唯一次的なるものに触れるといふことができる。かゝる限定を個物と環境との関係から見れば、それはすべてを包む無限大の環境の自己限定と考へることができるであらう。時の瞬間といふ如きものは無限大なる圓の自己限定の中心と考へることもできる。而して更に瞬間から瞬間に移る時間的系列を限定するものは、かゝる無限大の圓を包むもの、即ち周邊なき圓と考へねばならぬであらう、一般者の一般者といふことができる。かゝる意味に於て、一面に於て非合理的として物質と考へられるものは、一面に於て無限の生命と考へることができる。一次的なるものを限定するものは、一步一步が創造的な永遠の生命と考へることができる。併しかゝるものも、尚眞に絶対無の限定といふべきものではない、絶対の死即生なる絶対面的限定といふべきものでない。眞の絶対無の限定と考へられるものは、單に周邊なき圓といふ如きものではなくして、その到る所が中心となるものでなければならぬ。かゝる一般者の自己限定として絶対に死して蘇るといふ辯證法的に自己自身を限定するものが限定せられるのである、個物が環境を限定し環境が個物を限定するものが考へられるのである。かういふ立場から見れば、一次的に自己自身を限定す

る永遠の生命と考へられるものも、尚ノエマ的に限定せられた一つの特種なる生命といふ意義を脱することはできない、眞の永遠の生命といふことはできない。周邊なくして到る所が中心となる圓の自己限定としては、之に於て無数の自己自身を限定する圓が限定せられると考へることができる。無数の今が限定せられると考へることができる。我々の個人的自己と考へるものは、皆かゝる絶対無の限定面的限定として之に於て限定せられるのである。かゝる圓の周邊的限定として、一面に自己自身を限定する無数の無限大の圓が限定せられると考へることができるであらう。無数の無限大の圓が之に包まれると考へることができる。而してそれが周邊なき圓の自己限定として、即ち無の一般者の限定として、個物が個物を生み、點より點に移る一次的なる無限の系列と考へねばならぬであらう。斯くして永遠の過去から永遠の未來に流る無限の時の流といふものが考へられるのである。到る所が中心となる無邊の圓の自己限定として、之に於てあると考へられる我々の個人的自己は、それが周邊的に自己自身を限定すると考へられるかぎり（ノエマ的に自己自身を限定すると考へられるかぎり）、環境的には何處までもかゝる無限大の環境によつて限定せられて居ると考へられねばならない、永遠に流れる時によつて限定せられると考へられねばならぬ。昨日の我と今日の我とが直に結合して一つの個人的自己といふものが考へられるかぎり、それはかゝる時に於てあると考へられねばならないのである。我々の個人的自己がノエシスの限定の底に死即生なる絶対面に触れると考へられるといふこと

は、ノエマ的にかゝる時によつて限定せられるといふことを意味せねばならない。併し我々の生命の眞の實在性はかゝる環境的限定に於てあるのではない、絶対に死して生れる所にあるのである。我々は絶対に底から生れるのである。かゝる意味に於て我々の生命は過去から生れるのでなく、未來から生れるといふことができる、否、永遠の今の自己限定として現在が現在自身を限定するといふ意味に於て生れるのである。我々の生命は非連續の連續として限定せられるのである。そこに我々の生命の社会性といふものがなければならない、子は親から生れないといふ意味がなければならぬ、親と子と同列的な意義がなければならない。ベルグソンは画家のパレットの上に盛られた色を見れば、我々は大概如何なる画を描くかを想像することができるが、實際如何なる画が出来るかは画家自身も知ることはできないと云ふ。併しかゝる意味に於て非合理的と考へられるものは、尚、主客合一の非合理性、藝術的非合理性といふ如きものでなければならぬ。我々の生命はかゝる所から生れるのではない。かゝる生命は非實在的なイデア的生命に過ぎない。眞の生命に於ては我々は絶対に非合理的なるもの、物質といふ如きものに撞着するのである。そこには眞に限定するものなきものの自己限定として、唯、事實が事實を限定するといふの外ない。我々は、唯、之を映すと考へるのみである。對象的には我々は我々自身を失つて單に非合理的なる自然といふ如きものも考へられる。合理的なるものと非合理的なるものと、所謂形式と質料との對立といふ如きものも、かゝる立場に於て考へられるのである。

そこに環境的限定と個物的限定とが分裂すると考へられるのである。而もかゝる死の底から蘇るといふ所に、我々の眞の實在的生命の意義があるのである。かういふ意味に於てベルグソンの生命といふ如きものは實在的ではない、身體のない生命である。ベルグソンに於ては身體は生命の道具たるに過ぎない。私は自然科学者の考へる如き意味に於て生命の基礎に物質を置くのではないが、非合理的なるものを基礎とするといふ意味に於て、むしろ實在的生命は身體的と考へたいと思ふ。身體なくして實在的生命といふものはない。而して我々の眞の生命といふものを斯く絶対に死から蘇ることであるとするならば、それは内面的持續といふ如きものに求むべきではなくして、實踐的行為といふ如きものに求むべきであると思ふ。行為に於ては我々は過去から限定せられるのではなくして、未來から限定するのである。否、限定するものなき限定として現在が現在自身を限定するといふことが行為といふことでなければならない。環境が個物を限定し、個物が環境を限定するといふ意味に於て、辯證法的に自己自身を限定するものが、行為するものでなければならない。ベルグソンの純粹持續の生命といふ如きものも、かゝる限定に基礎付けられたものでなければならぬ。而も環境と個物とが一つの流となることによつて辯證法的意義を失つたものと云ふことができる。

我々の眞の生命と考へられるものが、死即生なる絶対面的限定として、以上述べた如きものとするならば、生命といふものが一つの大なる流と見られる前に、その根柢にすべてを包む空間的限定とい

ふ如きものが考へられねばならぬ。周邊なくして到る所が中心となる圓の自己限定として、永遠の今の限定といふ如きものが考へられねばならない。その到る所が中心として、之に於て自己自身の限定面を有つた無数の圓が空間的に限定せられると考へられると共に、周邊なき圓の限定として、即ち一般者の一般者の限定として、之に於てあるものが無限の流によつて限定せられると考へられるのである。大なる生命の流は死即生の絶對面の中に廻轉しつつあるのである。時は永遠の今の中に生れ永遠の今の中に消え去ると考へられる如く、歴史は永遠の今の中に廻轉しつつあると考へることができる。我々はいつでも永遠の今に接して居るのである。我々は各の時代に於て絶對面に触れて居る故に、環境が個物を限定し、個物が環境を限定するといふ我々の世界と考へられるものは、いつも永遠の今の自己限定の意味を有つたものでなければならぬ。現在が現在自身を限定するといふ事から我々の世界といふものが考へられねばならぬ。時は何等かの意味に於て限定せられた現在から考へられると考へられる所以である。力學的全體として時代といふものが考へられるのも、此の如き時を包む永遠の今の自己限定の意味に於て考へられねばならない。かゝる限定を單に死の面に即して考へる時、又單に生の面に即して考へる時、いずれも非現實的にして考へられた世界たるを免れない。我々は各の瞬間に於て永遠に未來なるもの、永遠に過去なるものに接して居るのである、否、永遠の今に接して居るのである。我々はいつも我々の底に死即生なる絶對面に接して居るのである。我々は現實の底に於て

いつも絶對の死、即ち絶對に非合理的なるものに触れて居る。そこでは事實が事實自身を限定し、我々は感官的として唯、之を映すと云ふことができる。之を物質といふならば、我々は物質に直接すると云ひ得るであらう。これと共に、我々は現實の底にいつも永遠の生に接して居るのである。時を越えて而も時に於て自己自身の内容を限定するものに撞着するのである。そこに我々の個人的生命といふものがあるのである。而して個人的生命といふものなくして實在的生命といふものはない。併しかゝる實在的生命と考へられるものは、瞬間が瞬間自身を限定する意味に於て、個人的と考へざるを得ないと共に、周邊なき圓のノエマ的限定、即ち一般者の一般者の限定として無限の流に於てあると考へざるを得ない。かゝる意味に於て無限の時の流と考へられるものは、限定するものなきものの限定として、之に於てあるものから繰り返すことができないと考へられると共に、之を死の面に即して考へれば、過去から未來への無限の流と考へられ、之を生の面に即して考へれば、逆に未來から過去に向つての無限の流と考へられる。無限なる時の流と考へられるものは、その實、過去から始まるのでもなければ、未來から始まるのでもない。時は永遠の今の自己限定として、現在が現在自身を限定するといふことから考へられるのである。かゝる限定は到る所が中心となり周邊なき圓の自己限定を意味し、一般者の一般者の限定を意味するのである。かゝる圓に於てある無限大の圓と考へられる我々は、何處までも現在が現在自身を限定すると考へられる一般者の一般者によつて限定せられると考へるこ

とができる。我々はいつでも何等かの与えられた環境に於てあるのである、与えられた現在に於てあるのである。而もかゝる現在と考へられるもの、即ち環境と考へられるものは、絶対の無の限定として何處までも固定したものではない、閉じられた圓ではない。環境が個物を限定すると共に、個物が環境を限定するのである。環境は自己自身を否定すると共に、自己自身を肯定する意味を有つてみなければならぬ。現在が現在自身を限定するといふことは、いつもかゝる意味を有つてみなければならぬ。かゝる限定の無限なる重疊として、無限大なる時の流といふものが考へられるのである。現在が現在自身を限定することから、時の流といふものが考へられるのである。それ故に、無限なる流と考へられるものは、永遠の今の自己限定の立場からは、空間的に無限大の圓の無限の重疊と考へることができる。現在が現在自身を限定する意味に於て、圓環的に自己自身を限定する時の流といふものは、永遠の今が自己の中に自己を映す永遠の今の姿といふことができる。永遠の今と考へられるものが、かゝる意味に於て時を包み時を基礎付けるものとして、我々は瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる自己限定の底に於て、いつも永遠の今の自己限定に触れると考へることができるのである。眞に個物的に我々を限定するものは、すべてを包む一般者でなければならない。この故に我々は死即生の絶対面に撞着するものとして、一面に絶対に非合理的なるもの、物質に撞着すると考へられると共に一面に永遠の生命に接すると考へることができる、時を越えたものに触れると考へられるのである。

而も我々はすべてを包む絶対的環境に於てあるものとして無限の環境から限定せられて居ると考へざるを得ない、現在が現在自身を限定する意味に於て又無限の果てから限定せられて居ると考へられるので有る。

我々は何處までも環境的に限定せられるといふ意味に於て、絶対的環境的限定として過去から未來に亘る宇宙的發展といふ如きものが考へられ、それが我々の生命をも包み、我々の生命をも限定するものとして宇宙的生命とも考へられるが、時は絶対無の限定として永遠の今の中に包まれ、永遠の今の中に廻轉するといふ意味に於て、かゝる限定の背後に空間的なものがなければならぬ。而も自覺的限定として時といふものが考へられるといふ意味に於ては、かゝる空間的限定と考へられるものは、むしろ社会的といふべきものであり、宇宙的發展と考へられるものも歴史的といふことができる。絶対的環境的限定と考へられるものは、固、死即生なる絶対無の自己限定における死の面と考へべきものであり、各自の意識面を有つた我々の個人的自己と考へられるものは、かゝる死即生の絶対的限定面に沿うて考へられるのである。故に我々の自己の自己限定の底には、時を越えた意味がなければならぬ。空間的・社会的意義がなければならぬ。眞の生命といふものも、かゝる意味に於て考へられるのである。生命の根柢には流て流ざるものがなければならぬ。絶対の死の面と考へられるものが物質界と考へられるものであり、我々是一面に於ていつも物質界に接して居ると考へられると共に、死の面即生の面といふ意味に於て一面に意識的であり、表現の世界、歴史の世界に接して居るといふことができる。我々は行為するものとして眞に自己自身の生命を有し、眞に生きるといふことができるのである。我々は絶対面的限定として、一方に絶対的環境的限定によつて限定せられ、無限なる時の流に於てあると考へられなければならぬであらう。併し我々は單にかゝる意味に於てあるのではない、絶対無の場所的限定としてあるのである。外延的限定としてあるのである。かゝる考へる基礎付けについては、この論文の「三」の後方に於て述べた所を参照せられんことを望む。我々の自覺的限定に於て、自己自身の底に絶対の他を見るといふことによつて自己が自己となると考へられ、そして我々

の於てある世界と考へられるものが、かゝる自覺的限定によつて限定せられたものとするならば、我々の世界と考へるものの根柢に社会的限定の意味があると言わねばならぬ。過程的辯證法的限定として過去から未來にわたる無限の時の流と考へられるものの底に、一即多として場所的限定の意義があるとすれば、現在が現在自身を限定することによつて自己自身を限定する瞬間の底に、永遠の今の空間的限定の意味がなければならぬ。

二

以上述べた所を概括すれば、すべて有るものは何かに於てあり、具體的有と考へられるものは、環境が個物を限定し個物が環境を限定するといふ意味に於てあるのである。時といふものが考へられるのも、何等かの意味に於て現在と考へられるものから出立して、その自己限定として直線的進行といふものが考へられると共に、その極限に於て逆に瞬間が瞬間自身を限定することによつて考へられるのである。時は非連續の連續として考へられるのである。かゝる考へ方からは、我々は一面に於て何處までも環境から限定せられると考へられねばならぬ。環境の上に更に環境が考へられ、一般者の一般者の限定として、我々は無限なる時の流に於てあると考へられねばならぬ。併しすべてを包む絶對の環境と考へられるものは、固、絶對に無なるものでなければならぬ。限定するものなくして自己自身を限定すると考へられる瞬間的限定に於て、我々は絶對の無といふものに撞着するのである。眞に一切を包む絶對の環境といふものに触れるのである。かゝる立場から云へば、嚮に何處までも個物を

限定すると考へられた無限の環境と考へられるものは、かゝる絶對の無によつて限定せられたものでなければならぬ。自己自身の限定によつて個物を限定すると考へられる現在の自己限定と考へられるものは、永遠の今が自己自身の中に自己を映す永遠の今の姿といふ如きものでなければならぬ。自己自身を限定する瞬間的限定の立場からは、いつも逆に環境を限定すると考へることができ、環境的限定の立場から時は無限の過去から限定せられると考へられるに對し、時は未來から限定せられると考へることができる。時は永遠の今の中に廻轉すると考へることができるのである。此故に、我々はかゝる瞬間的限定の尖端に於て、一面に無限の過去に接すると考へることができる、永遠なる時の始に接すると考へることができる。換言すれば、之に於てあるものは無限の過去から限定せられて居ると云ふことができる。我々はいつも瞬間的限定の尖端に於て一度的なるものに接すると考へるのである。我々はそこに絶對に非合理的なるものに撞着すると考へることができる。絶對に非合理的に我々を限定するものに撞着すると考へることができる。而して斯く無限の過去から非合理的必然を以て我々を限定するものを物質と呼ぶならば、我々はそこに物質に撞着するといふことができるであらう。我々は之に對し單に映すものと考へられるのである。併し瞬間的限定の一面に於て斯く考へられると共に、個物が個物自身を限定することによつて環境を限定するといふ意味に於て、又そこに我々は無限の未來から我々を限定するものに撞着すると考へることができるであらう。そこに我々は永遠の生命に接

すると云ふことができる、我々は何處までも自由であると云ふことができる。それで、永遠の今の自己限定として之に於てあるものは、無限の環境から限定せられると考へられると共に、瞬間的限定の尖端に於て何處までも自己自身を限定するのである、即ち働くものである。働くものとして、我々は現實の底に、何處までも永遠の過去から我々を限定するもの、即ち絶対に非合理的なるものによつて限定せられる、即ち我々は身體を有つと考へると共に、我々は何處までも、我々の環境を造り行くと考へることができる。行為的自己の自己限定に對して環境的限定と考へられるものは、表現的と考へられねばならぬ。我々は我々の現實の底に無限の過去を見ると考へる時、即ち無限に非合理的なるものを見ると考へる時、我々は何處までも物質界によつて限定せられて居ると考へざるを得ない。併し我々が瞬間的限定の尖端に於て無限の未來から限定せられて居ると考へる時、此世界は我々の意志實現の場所といふ意味を有つて來なければならぬ。自己に對して立つものは單なる物質といふ如きものではなくして、質料といふ如き意味を有つたものでなければならぬ。又我々を囲み我々を限定すると考へられる、我々の於てある環境と考へられるものも、單なる物質界といふ如きものではなくして、表現の世界といふ如きものでなければならぬ。純なる物質の世界は我々の如何ともすることのできない世界である、單なる物質界には行為もなければ、表現もない。我々の行為的自己に對しては、非合理的なるものの意味が變ぜられなければならぬ、客觀的世界と考へられるものの意味が變ぜなければ

ならない。それは一面に於て何處までも我々を否定するもの、即ち絶対に非合理的なるものの意味を有すると共に、我々が之に於て生れ、之に於て生きるといふ意味を有つものでなければならぬ。一面に於て、その背後に非合理的なるものとして何處までも物質界といふ如きものが考へられねばならないと共に、一面に於て永遠の生命といふ如きものが考へられねばならぬ。永遠の今が自己自身の中に映す永遠の今の姿として、自己自身を限定する現在と考へられるものは此の如き意味を有つたものでなければならぬ。かゝる意味に於て、永遠の今の自己限定として之に於てあるものは、すべて働くものの意味を有し、自己自身を限定するといふ環境から限定せられる、即ち大なる時の流に於てしかあると云ふことができる。而して瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる瞬間的限定の尖端に於て、いつも死即生なる眞の生命に接触する、即ち物質即精神なる神に触れるといふことができる。かゝる意味に於て大なる生命の流と考へられるものは、死の面に即しては生物的生命と考へられ、更に宇宙的生命とも考へられるであらう。併し生の面に即しては、社会的・歴史的生命と考へられる。

私と汝とは以上述べた如き意味に於て、永遠の今の自己限定として、即ち働くものとして、共に永遠の今に於てあるのである。永遠の今の自己限定といふものを一般者の自己限定と考へれば、我々はその外延として之に於てあると云ふことができる。我々は各自の内的世界に於てあり、所謂外界を通じて相働くのではなく、同じ一般者によつて限定せられ、同じ一般者に於てあるものとして相関係す

るのである。色は色と相関係するが色は音と相関係せない、私と汝と互に人格として相働くにも、同一の一般者に於てあるといふ意味がなければならぬ。永遠の今の自己限定として瞬間が瞬間自身を限定するといふ意味に於て、之に於てあると考へられる我々は、何處までも過去から限定せられると考へられるであらう。我々は現實の底から何處までも物質によつて限定せられて居る、我々は身體を有つことによつて我々であるのである。私は汝と共に同じ物質であるとも言へる、私の聲は空氣の波動として直に汝の耳に働くのである。併し我々は單にかゝる環境から限定せられるものではない、我々は單なる物質ではない。私も汝も共に働くものとして瞬間的限定の尖端に於て未來からの限定の意味を有つて居るのである。我々は是に於て環境的限定から離れると考へることができる、過去からの必然的限定を脱して自由となり、創造的となると云ふことができる。我々が各自に有する意識面と考へられるものは、斯く未來からの限定の意味に於て考へられるのである。無論未來から限定すると云へば、何物かを創造すると考へねばならぬであらう。そこに永遠なる生命に接するとして、ベルグソンの創造的進化の如きものも考へられるであらう。併し我々はそこに絶對の死即生なる絶對無の自己限定面に撞着するとして、まず單に映すといふものが考へられねばならぬ。絶對に限定するものなきものの限定として、映すといふことが考へられねばならない。我々を何處までも過去から限定すると考へられた環境的限定面、即ち物質面と考へられるものが、その自己限定の極限に於て自己自身の限定

を失うと考へられる時、單に自己自身の限定を越えたものの内容を映すものといふ意味を有たなければならぬ、物質は是に於て單に映す鏡といふ意味を有たなければならぬ。之に於て現れるものは、物自體ではなくして、物自體の影と考へられるのである。斯くして我々の意識面といふものが考へられ、身體によつて共同の世界を有つたと考へられた我々の自己は、自己自身に唯一なる各自の世界を有つと考へられる。環境的限定の意義を失つた環境と考へられるものは單なる映す鏡と考へられ、更にそれがその背後から自己自身を限定するものに属するものとして、各自の意識界といふものが考へられるのである。併し翻つて考へれば、前に瞬間的限定の尖端に於て、何處までも過去から我々を限定すると考へられた物質界と考へられるものは、固、永遠の今の自己限定面として死即生の意味を有つたものでなければならぬ。斯くして、瞬間が瞬間自身を限定すると云ひ、我々は瞬間的限定の尖端に於て未來から限定すると云ふことができるのである。物質界といふものが斯く考へられた時、それは既に單なる環境的限定面といふべきものではなく、之に於て環境が個物を限定し、個物が環境を限定する辯證法的限定面といふ意味を有つてゐなければならぬ。環境的限定の極限に於て逆に個物から限定せられるといふことによつて、過去からの限定の極限に於て、逆に未來から限定せられると考へることによつて、各自の意識面といふものが考へられるとするならば、そこに無數の意識面といふものが考へられねばならない。絶對否定の辯證法的限定から、かゝる量的關係といふものが出て來な

ければならないのである。環境的限定の極限に於て、個物が自己自身を限定することによつて、逆に環境を限定すると考へる時、個物は各自の自己限定面を有し、かゝる個物を限定する辯證法的限定面と考へられるものは自己自身を限定する無数の限定面を限定すると云ふ事ができる。私と汝とはかゝる限定面的限定としてそれに於てあるのである。私の意識を限定するものは汝の意識を限定するものでなければならぬ。汝の意識を限定するものは私の意識を限定するものでなければならぬ。私と汝とは同一の原理によつて限定せられるのである。嚮に私と汝とは共に身體を有することによつて共に物質界に属し、私の聲は空氣の波動として汝の耳に達することによつて私の意識内容を汝に通ずると云つたが、私の意識内容を汝に通ずるものは單なる空氣の波動ではなくして、私の意識内容の表現としての空氣の波動でなければならぬ、言語でなければならぬ。私と汝とは未來から現在を限定し行くものとして、即ち働くものとして、我々を囲む環境と考へられるものは、單なる物質界といふ如きものではなくして、表現の世界といふものでなければならぬ。物質と考へられるものも、單なる物質といふべきものではなくして、社会的・歴史的實在の意義を有つたものでなければならぬ。すべて有るものは環境が個物を限定し、個物が環境を限定する意味に於てあるのである。過去が未來を未來が過去を限定する意味に於てあるのである。單なる物質界といふ如きものは、唯、環境的限定の極限に考へられた抽象的限定面たるに過ぎない。私と汝とは空氣の波動といふ物質を通じて相知るのではな

く、言語を通じて相知るのである。我々の身體と考へられるものそのものも、物質として考へられるものではなく、社会的・歴史的物として考へられるものでなければならぬ。私と汝との間には、同一の一般者に於てあるものとして、色が色に干渉し、音が音に干渉する意味がなければならぬ。私と汝とは共に辯證法的限定によつて限定せられたものとして、私と汝とは絶對の否定によつて媒介せられてあると考へられねばならぬ。斯く絶對否定の媒介といふことが私と汝との間に物質界といふものを考へることとなるのであるが、かゝる絶對の否定面といふものは私と汝とを切断するものではなくして、私と汝とを媒介すべく置かれたものでなければならぬ。絶對の否定は肯定を含んだ否定でなければならぬ。それは何處までも非合理的といふべきであらう、併し單なる物質界といふ如きものでなくして表現の世界といふ如きものでなければならぬ。純物理的現象として空氣の波動と考へられるものも、我々の直接經驗の事實といふものを絶對の環境的限定の立場から統一したものに過ぎない。

私と汝とは同じ一般者によつて限定せられ、之に於てあるものとして汝を限定するものは私を限定するものであり、私を限定するものは汝を限定するものであるとするも、私と汝とを限定する限定原理といふべきものは如何なるものであるか。如何なる意味に於て私の存在は汝の存在を要求し、汝の存在は私の存在を要求し、私は如何にして汝の存在を知り、汝は如何にして私の存在を知るか。又何

處まで私は汝の意識内容を知り、汝は私の意識内容を知ると云ひ得るであらうか。私の表現の類推によつて汝の表現を知るといふ類推説の維持し難きは云ふまでもなく、マックス・シェーレルも云つて居る如く、感情移入といふ如きものを以てするも、私が汝の個人的存在を知り、汝が私の個人的存在を知るといふことを説明し得ないであらう。瞬間的限定の尖端に於て、時が未來から限定せられるといふ意味に於て、我々は働くものとして有るといふ時、我々は無限なる當為によつて限定せられるといふことができる。終に現れるものが始から限定するものであるといふのが、我々の合目的因果と考へるものである、生物學的現象といふものは斯くして考へられる。我々も生物としてかゝる法則によつて支配せられると云はざるを得ない。併し我々は身體的自己として何處までも生物學的法則に支配せられるとしても、我々は單なる身體的自己ではない。單なる生理的法則を以てしては我々の意識現象は説明せられない。單なる物質から意識は出て來ない。生物學的見方といふのは合目的的と云つても、單なる環境的限定を基礎とした生命の見方に過ぎない。過去を基礎とした時の見方に過ぎない。それは何處までも瞬間的限定に達することはできない。かゝる時には眞の瞬間といふものはない。かかる生命には眞に生きるといふことはない。眞に我々の人格的生命を限定するものは、かゝる限定をも否定したものでなければならない、何處までも過去からの限定を包むものでなければならない。過去からの限定といつても、過去は無限の彼方にあるのではなく、眞の過去は瞬間的限定の底にあるの

である。現實の底における絶對の否定から過去が始まるのである。無限の過去から限定せられると考へられる瞬間的限定の底から、之を翻すことによつて働くものとしての我々を限定すると考へられるものは、單に合目的的作用といふ如きものではなくして、當為の意味を有つたものでなければならない。私といふものが外から限定せられると考へられる限り、それが如何に合目的的と云つても、眞の私といふものではない。衝動に従うといふことは自己が自己を否定することではなければならぬ、當為が衝動を包む所に、眞に自由なる人格的自己が見られるのである。斯く考へるならば、永遠の今の自己限定として我々が限定せられると云ふには、當為の意味が含まれてゐなければならない。瞬間が瞬間自身を限定することによつて時が限定せられると云ふのには、當為の意味がなければならぬ。絶對無の限定として之に於てあるものは、環境が個物を限定し個物が環境を限定するといふ意味に於て辯證法的と考へられるが、かゝる環境的限定と考へられるものは一面に當為の意味を有つたものでなければならない。眞の辯證法的限定と考へられるものは、絶對の死によつて生れるといふことでなければならぬ。何等かの意味に於て對象的限定といふものが考へられるかぎり、眞の辯證法的限定といふものは考へられない。絶對の死に入ると考へられるとき、そこに所謂内部知覺といふ如きものすら断たなければならない。蘇生の期待を有つといふことすら、眞に死することではない。かゝる絶對の死より蘇るものが、眞に人格的自由の自己といふべきものであり、それが眞に辯證法的存在といふべ

きものである。是に於て、我々をも包み我々を限定する環境と考へられるものは、一般に一般的自己といふ意味を有つて居ると考へられるもことができる、社会的歴史的生命の意義を有つたものと云ふことができる。

人格的自己と云へば、我々の身體的束縛を脱却して單に精神的なる自己と考へられる。併し我々の人格と考へられるものは、何處までも個物的でなければならぬ、人格の底には何處までも達することのできない非合理的なるものがなければならない、身體なくして人格といふものはない。我々の身體の底に考へられる非合理的なるものは、何處までも我々を殺し、我々を否定する意味を有つて居ると共に、我々を肯定し我々を生むといふ意味を有つてゐなければならない。瞬間的限定の底には死と共に直に生の意味がなければならない。生物學的生命の底には何處までも物質があり死があるが、人格的生命の底には何處までも生命がなくてはならぬ。非合理的として物質と考へられるものも、そこには我々を生むものの意味を有つてゐなければならぬ。瞬間的限定の底に於て未來から限定せられると考へる時、我に對して絶対に非合理的なるものは物質ではなくして他人である。自然と考へられるものも尚、カント哲學で云ふ如く意識一般の綜合統一によつて構成せられると云ふことができ、斯く考へる時、自然も我によつてあると考へることができる。併し他の人格と考へられるものは何處までも我に對して立つものと云はざるを得ない。瞬間的限定の尖端に於て此瞬間が無限の未來から限定せら

れると考へる時、單に無限の過去からの限定が消されるのではない。もし爾考へるならば、瞬間といふものはない、即ち現在といふものはない、未來のみあつて現在なきものは空想たるに過ぎない。未來からの限定が過去からの限定に對して當為の意義を有し、當為が衝動を包むと考へられる所に、人格的なるものが考へられると云つても、人格は單なる當為であると云ふのではない。瞬間的限定の底には、何處までも未來からの限定に反抗するものがなければならない、何處までも過去からの限定の意味を有つたものがなければならない。併し無論、それは單なる過去からの限定と考へられるものではない、過去からの限定と考へられるものは、何處までも覆へさるべきものである。それは過去からの限定に對しても、未來からの限定に對しても非通約的なものでなければならぬ、時の限定を越えたものでなければならない。そこにプラトンがパルメニデスに於て、運動と静止との間に位し、そこから運動が静止に變じ、静止が運動に變ずると考へた、時に属せざる瞬間の意味がなければならない。それは時を包む永遠の今の自己限定として、自己自身を限定することによつて時を限定すると考へられるものでなければならぬ。そこから無限の過去が限定せられると考へられると共に、無限の未來も限定せられるのである。單なる當為と考へられるものは、かゝる限定に於て唯、過去からの限定が越えられるといふ意味を有つものに過ぎない、人格的限定の一面たるに過ぎない。それは環境が個物を限定し個物が環境を限定するといふ意味に於て考へられる環境的限定の一面に過ぎない。當為が我々

を限定すると考へられねばならぬと共に、我々が當為を限定すると考へられねばならないのである。當為の内容は個人が個人自身を限定する所から定まるのである。上に云つた如く、環境が個物を限定し個物が環境を限定する辯證法的運動として、絶對無の立場から無限なる時の流といふものが考へられると共に、眞に絶對の無と考へられるものは、かゝる時の流を包んだものでなければならぬ、時は永遠の今の中に廻轉するのである。時は無限の過去から考へられるのでもなく、無限の未來から考へられるのでもない、時は現在が現在自身を限定することから考へられる、その根柢に於て瞬間が瞬間自身を限定するといふ意味がなければならぬ。かゝる意味に於て自己自身を限定する瞬間と考へられるものは、唯、時を包む永遠の今の自己限定としてのみ考へられるのである。自己に於て自己を限定する永遠の今の自己限定として、之に於てプラトンのパルメニデスに於て云つて居る如き瞬間が無数に限定せられるのである。自己自身の限定によつて時を限定する瞬間と考へられるものは、永遠の今の外延といふ如き意味を有つたものでなければならぬ。辯證法的限定を單に過程的にのみ考へるならば、辯證法的限定の底にかゝる場所的限定といふ如きものを考へ得ないであらう。併し眞の辯證法と考へられるものは、絶對の否定に基礎付けられて居るものでなければならぬ。絶對の死から生きるといふことでなければならぬ。蘇生の期待を有つて死するものは眞に死するものでない、そこには尚、未來からの限定の意味が残されて居ると云つてよい。眞の辯證法と考へられるものは、ノエマ的

には絶對の断絶であると共に、ノエシ的に直接の結合と考へられるものでなければならぬ。斯くして始てその一步一步が絶對に触れると云ふことができる。絶對の死即生といふことは、唯、ノエマ的に一つのもので死即生であると云ふのではない、又、過程的に否定が即絶對の肯定であると云ふのでもない、自己が絶對に他なるものと一であるといふことでなければならぬ、自己の中に絶對の他を見、絶對の他の中に自己を見るといふことでなければならぬ。絶對に他なるものとは考へることのできないものである、而もそれが私をして私たらしめるものであるといふ所に、眞の死即生の意味があるのである。眞の辯證法と考へられるものはかゝる場所的限定に基礎付けられて居るものでなければならぬ、過程的辯證法と考へられるものは之によつて考へられるのである。我々の人格的生命と考へられるものの根柢には、かゝる外延的關係がなければならぬ、親も子を生まないといふ意味がなければならぬ、絶對に獨立なる個物の統一といふことがなければならぬ。かゝる矛盾の統一として無限なる生命の流といふものが考へられるのである。個物が無限の過去から限定せられると考へる時、即ち個物が限定せられた一般者の限定として考へられる時、それは何處までも達すべからざるものである、何處までも非合理的なるものとして残されねばならぬ。従つて個物と個物との媒介なるものは、かゝる一般者に於ては求められない、かゝる一般者に於ては個物的外延を限定する原理はない。否、かゝる一般者は個物を否定すると云つてよい。自然には個物といふものはない。個物が無限の未

來から限定せられてあると考へる時、それは目的によつて働くものである。或は當為によつて行為するものである。此場合は前の場合と異なり、個物を否定し又は之を外に置くのではなくして、何處までも之を内に限定しようといふ意味を有つて居る、個物を内から限定するのである、目的は個物そのものの目的であり、當為は個物そのものの當為である。併し個物が働くと思へられるかぎり（そして働かない個物といふものはないのであるから）それは何處までも單に目的的に限定することのできないものでなければならない、目的的一般者の中に即ち反省的一般者の中に包むことのできないものでなければならない。働くものとしてそれが實在的と思へられる限り、その底に現在が現在自身を限定するといふ意味がなければならぬ、絶対に非合理的なるものがなければならない、人格と云つても單なる當為ではない。かゝる意味に於て非合理的と思へられるものは何であるか。それは單なる物質といふものではない、物質は目的も當為も有たない。かゝる非合理性によつて基礎付けられた個物、即ち生きたものに對しては、物質は一面に抵抗の意味を有し、一面に手段の意味を有するに過ぎないのである。然らば、かゝる個物を限定し、個物と個物とを媒介する一般者と考へられるものは如何なるものであるか。過去からの限定の極限に於て、即ち瞬間的限定の尖端に於て、直ぐ之を覆へして未來からの限定と考へる時、私の所謂有の一般者が無の一般者によつて裏付けられたものとして、無限の連續といふものが考へられるであらう。而して既に有の一般者が無の一般者によつて包まれると考へ

られるかぎり、之に於てあるものはいつも未來から限定せられるものとして、合目的的世界といふものが考へられるであらう。併しかゝる一般者の限定としては眞の個物的生命といふものは考へられない、唯、無限なる生命の流といふ如きものが考へられるまでである。眞に生きた個物といふものが考へられるには、無が有に沿うて限定するのではなく、無が有を限定するのでもなければならぬ。そこに絶対無の自己限定として辯證法的運動といふものが考へられるのである、死即生、生即死として個物が個物を限定するといふことができるのである。是に於て、一般者が個物を限定するのではなく、個物が一般者を限定するのである、否、個物が一般を限定し、一般が個物を限定するのである。かゝる個物的限定の底に、之を基礎付けるものとして非合理的なるものが考へられるならば、それは所謂物質といふ如きものではなくして辯證法的物質といふべきものであらう。而してかゝる物質は絶対の無と考へられるものでなければならぬ。

由來、辯證法といふも、單に過程的に考へられその根柢に場所的限定のあることが注目せられないのであるが、絶対の死即生である絶対否定の辯證法に於ては、一と他との間に何らの媒介するものがあつてはならない、自己が自己の中に絶対の他を含んでみなければならぬ、自己が自己の中に絶対の否定を含んでみなければならぬ、何等か他に媒介するものがあつて、自己が他となり、他が自己となるのではなく、自己は自己自身の底を通して他となるのである。何となれば自己自身の存在の底に他が

あり、他の存在の底に自己があるからである。私と汝とは絶対に他なるものである。私と汝とを包摂する何らの一般者もない。併し私は汝を認めることによつて私であり、汝は私を認めることによつて汝である、私の底に汝があり、汝の底に私がある、私は私の底を通じて汝へ、汝は汝の底を通じて私へ結合するのである、絶対に他なるが故に内的に結合するのである。瞬間的限定の尖端に於て、瞬間から瞬間に移り行くと考へられる時の進行といふものの根柢にも、かゝる場所的辯證法の意義がなければならない。瞬間は何等かの媒介によつて他の瞬間に移るのではない。然らばと云つて自己自身によつて他に移るのでもない。もし自己自身によつて他に移ると云ふならば、單なる内面的持續の如きものの外考へられない。瞬間は自己自身の底深く秘められた自己否定によつて、他の瞬間に移り行くのである。無限の過去から無限の未來に亘る時の流と考へられるものは、かゝる意味に於て瞬間そのものの中に蔵せられたる無限なる自己否定の過程に過ぎない。故に、我々は瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる瞬間的限定の底深く入れれば入る程、そこにすべてを包む最大の時の流に撞着すると考へるのである、一度的なる絶対時に撞着すると考へるのである。そこに事實が事實自身を限定するといふ意味があるのである、周邊なくして到る所中心となる圓の周邊に撞着するといふことができるのである。時といふものを考へるには、何等かの意味に於て与えられた現在の自己限定といふものから考へて行かねばならぬ、そしてその無限に深く動き行く尖端が瞬間と考へられるのである。例えば、

圓錐形の基底から見てその深く動き行く頂點の如きものが瞬間と考へることができる。そしてその頂點が深くなればなる程、その基底が廣くなると考へ、その頂點が無限なる深さの極限に達したと考へられる時、その基底は無限大となる、否、周邊なき圓となると考へることができるのである、併し瞬間が瞬間自身を限定することから時の限定が考へられると云ふ時、かゝる考を逆にせなければならぬ。頂點の自己限定そのものの中に基底が含まれてゐなければならぬ、時を越えたものによつて時が限定せられるのである。單に頂點が深くなると共に基底が廣がるといふのでなく、基底から基底に移るといふ意味がなければならぬ、そこに周邊なくして到る所中心となる圓の自己限定の意義があるのである、現在が現在自身を限定すると考へられる底にかゝる意味がなければならぬ。

私は是に於て辯證法的限定の根柢に直観といふ如きものを考へざるを得ないと共に、眞の直観といふものは辯證法的運動を含んだものと考へざるを得ないと思ふ。古來、直観といふことは、單にノエマ的に主客合一とか、見るものと見られるものとが一であるとか考へられて、未だそのノエシ的限定の意義が明となつていない。直観といふことは、一つのものが直に他となる、一が自己自身の内から他に移り行くといふことでなければならぬ。その間に両者を媒介する何物かがあると考へられるかぎり、それは直観ではない。かゝる限定が考へられるには、一の底に他があると考へられねばならぬ、自己自身の底に絶対の他があると考へられねばならない。アリストテレスは主観と客観とを包む類概

念はないと云ふ如く、主と客とがノエマ的に一であるとは考へられないことである。主と客と一である、見るものと見られるものとが一であるといふことは、私自身の底に他があるといふことでなければならない、私は私自身の底を通じて他であるといふことでなければならない。直観に於てはノエマ的に一切が一であると考えべきでなく、ノエシス的に一が一切であると考えべきである、一即多と考えるべきである。單なる知覚作用と考へられるものであつても、それが直観の意義を有するかぎり、此の如き意義を含んでゐなければならない。それは單に受働的といふのではなく、形成作用の意味を有つてゐなければならない。眞の直観と考へられるものは辯證法をノエマ的に停止したものではない、辯證法的運動を包んだものでなければならぬ、否、之を基礎付けるものでなければならない。直観が單に受働的と考へられる時、唯、對象といふものがあるのみである、作用は單なる無と考へる外ない。直観といふことが内的持續の意味に考へられても、それは尙對象的連續といふものを考へるのと區別はない、それによつて直観的作用そのものの意義は明でない。直観的作用といふものが考へられるには、自己の内より他に移ると考へられねばならぬ。而もその自己の内といふものが何等かの意味に於て對象的連續と考へられるかぎり、一が他に移り行くといふことは、對象的限定によるといふ意味を脱することはできない。自發的と云つても、その自發的自己といふものが、何等かの意味に於て對象的に考へられるかぎり、眞の直観ではない。直観といふことが、眞に自己自身を媒介として自己の内

から他に移るといふこととすれば、如何なる意味に於ても對象的連續といふ如きものが考へられてはならぬ。作用が作用を生むといふ如きも、既に對象化せられた作用の連續に過ぎない。背理の様ではあるが、眞に自己の内から他に移るといふことは、一面に於て無媒介的に飛躍的に移るといふ意味を有つてゐなければならない、そこでは一步一步が直覺的と考へられるのである。何等かの意味に於て對象的限定といふ如きものが考へられるならば、眞の直観といふ如きものはない。眞の直観といふものが此の如く辯證法を包むと考へられねばならぬと共に、眞の辯證法といふものが絶對否定を媒介とする絶對辯證法と考へられるかぎり、直観によつて基礎付けられて居ると考へなければならない。唯、直観といふものが單に受働的とか、自發的とか考へられ、辯證法といふのも、ノエマ的に、連續的に考へられるかぎり、両者は全く離れたものと考へる外ないのである。我々が瞬間的限定の尖端に於て、絶對否定を媒介として、瞬間から瞬間に移ると考へられる時、それが無媒介的なが故に、眞の内的推移と考へられるのである。故に過去からの限定に對して、未來からの限定として、我々が行為すると考へる時、いつでも直観的なものに撞着せなければならないのも之によるのである。行為に於て我々はいつでも何等か時を越えた永遠なるものに撞着すると考へられねばならぬ。かゝる意味に於て行為が永遠の今の限定の意味を有つのである。見るといふ意味なくして行為といふものはない。私はフィードレルが藝術家的行動について云つて居るものが、眞の直観の意義を含んで居ると思ふのであ

る。瞬間的限定の尖端に於て過去からの限定の極限を越えると考えられる時、上に云つた如く單に過去を映す意識面といふものが考えられる。併しそれが單に未來からの限定に属すると考ふべきでなく、更に一層深く場所が場所自身を限定する意味に於て、未來からの限定をも映すといふ意味を有つて居るのである。即ち時を包むといふ意味に於て、それは直觀の意義を有つて居るのである。私は此論文の初に於て、物は何等かの環境に於てあると考えられ、環境が環境自身を限定すると考えられる極限に於て個物といふものが考えられ、逆に個物が個物自身を限定することによつて環境が限定せられると考えられる、かゝる辯證法的運動として實在界といふものが考えられるのであると云つた。時も現在が現在自身を限定するといふことから考えられると云つたが、かゝる意味に於て現在が現在自身を限定するとか、環境が環境自身を限定するとか考えられるには、右に云つた如き直觀の意義がなければならぬ。ここ私と汝との關係も此に求められなければならない。

三

右に述べた所によつて、私は略私が私自身を知るといふ自覺の意義を明にすると共に、私を限定すると共に汝を限定する私と汝との限定原理を明にすることができると思ふ。瞬間的限定の尖端に於て、時が未來から限定せられると考える時、環境が個物を限定し個物が環境を限定する辯證法的運動の世

界として、行為の世界といふものが考えられる。かゝる意味に於て、永遠の今の限定として社会的・歴史的世界の大なる時の流といふものが考えられる。併しかゝる無限なる辯證法的運動の根柢には、自己に於て他を見るといふ直觀の原理がなければならない。自覺といふには、種々の考へ方があるであらうが、いつも云ふ如く私は自己が自己に於て自己を見ると考へねばならぬと思ふのである。知るものと知られるものとが一であるとか、作用が作用を生むとか、或は事行とかいうのも、皆十分に自覺の意義を云ひ表すものではない。見るものと見られるものとは、即ち主觀と客觀とは絶対に異なつたものでなければならぬ、主と客とを含む一般者はない。自己が自己に於て自己を見ると考えられる時、自己が自己に於て絶対の他を見ると考えられると共に、その絶対の他は即ち自己であるといふことを意味してゐなければならない。而してかゝる意味に於て見るものと見られるものとを包むものは、限定するものなき限定として無の一般者と考えられるものでなければならぬ。それは無媒介的媒介、非連續的連續といふべきものでなければならない。而してそれ故に、眞に内面的限定と考えられるものでなければならぬ。自己が自己自身を見るといふことは斯くして考えられるのである、即ち見るものなくして見るといふことでなければならない。右の如き自覺の意義を環境が個物を限定し個物が環境を限定するといふ立場から見れば、「於てあるもの」が何處までも自己自身を限定することによつて環境を限定し、環境を限定することによつて自己自身を限定して行くと考えられる。そしてかうい

ふ意味にてすべて生命といふものが考へられるのであるが、かゝる辯證法的限定の極限に於て、一面に個物が自己自身を否定することによつて直に他の個物を限定する、即ち點から點に移ると考へられると共に、一面に環境が環境自身を限定すると考へられねばならぬ、即ち内面的連續として所謂自覺といふ如きものが考へられるのである。かゝる意味に於ては、藝術的直觀といふ如きものが自覺のノエマ的限定の極致と考へられなければならない。直觀といえば、いつもその典型として藝術的直觀の如きものが考へられるのであるが、藝術的直觀と考へられるものは、私の所謂辯證法的直觀、即ち眞の自覺と考へられるものの一つの場合に過ぎない、云はばそのノエシス的限定の意義を極小にしたノエマ的限定と云つてよい。自己の底に絶對の他を見るといふことは、絶對の他が自己であるといふことを意味すると考へることができ、自己の中に他を見るといふことをそのノエシス的限定と考へれば、他が自己であるといふことはそのノエマ的限定と考へることができるであらう。かゝる意味に於いて、辯證法的直觀のノエマ的限定として、いつも藝術的直觀といふ如き内面的連續作用が考へられねばならない。故に藝術的直觀と考へられるものは、その根柢に於て一種の行為でなければならない。見る事が行為であり、行為が見ることであり、行為によつて見るといふことが藝術的直觀といふことでなければならない。藝術的直觀といふも、行為的實在の世界を離れたものではない。それは我々の人格的活動の一部分でなければならない。藝術的内容も社会的・歴史的と考へられる所以である。之に

反し、何處までも自己の中に他を見ると考へられる我々の辯證法的自覺、即ち永遠の今の自己限定として歴史的に基礎付けられたる實在的自己の自覺は、一面に於ていつも行為によつて見るといふ意味を有つてゐなければならぬ、藝術的直觀の意義を有つてゐなければならぬ、イデヤを見るといふ意義を有つてゐなければならぬ。瞬間的限定の尖端に於て時を包む永遠の今の内容と考へられるもの、即ち辯證法的直觀の内容と考へられるものが、すべてイデヤ的と云ふことができる。かゝる意味に於てはプロチノスと共に、万物は見ることを求めると云ふことができる。自己の底に絶對の他を見ると考へる時、その内容は所謂知識的であることはできない。知識と考へられるものは、何處までも限定せられた一般者の内容といふ意味を有つたものでなければならない。自己自身を限定する環境的現在の底に何處までも又自己自身を限定する現在が考へられて行くといふのではなく、瞬間が瞬間自身を限定する瞬間的限定の尖端が止められると考へることによつて知識が成立するのである。それは無限なる瞬間的限定の尖端が止められることによつて限定せられた自己自身を限定する環境的現在の内容、即ち限定せられた一般者の内容と考へられるものでなければならない。自己の中に無限に自己自身を限定する他を見ると考へられる時、即ち現在の底に無限に自己自身を限定する現在が考へられる時、その内容は何處までも知識的に限定することのできないものでなければならない。かゝる内容が我々に情意の内容と考へられるものである。知識に於ては我々は物を外に見ると考へられるが、情意に於

ては我々は物を内に見ると考へるのである。情意の内容といふのは物を物として見るのでなく、物を我として見ることによつて、物を人格化することによつて、我々が物に對して有つ我々の自己限定の内容である。かゝる物の見方は物を外に見るのではなく、物を内に見るといふことでなければならぬ。それは自己の底に他を見、その他が自己であるといふ私の所謂眞の直観と考へられるものでなければならぬ。自己の内に自己を見るといふ自覺に於て、内に見られる絶對の他と考へられるものは物ではなくして、他人といふものでなければならぬ、而してかゝる他が自己に於て見られると考へられるかぎり、それは自己でなければならぬ。自覺的限定の形式に於て物の人格化といふことが考へられるのである。而してかゝる人格的世界の内容が情意の内容と考へられるものでなければならぬ。かゝる世界に於ては、物と考へられるものも單なる物ではなくして、欲するもの嫌うものでなければならぬ。情意の内容と考へられるものは、すべて自己の中に自己を見るといふ自覺の内容、即ち直観内容の意義を有つたものでなければならぬ。それは現在の内に現在を限定し行く、點から點に移る、非連續の連續の内容といふものでなければならぬ。そこに時を包む永遠の今の内容としてその一步一步が永遠なるものに触れると考へられるのである。故に藝術的直観の立場に於ては、色も線も無限の深さを有つと考へられる、色は無限なる色の融合、線は無限なる線の融合と考へられるのである。深さなきものの深さ、形なきものの形が藝術的直観の内容と考へられるのである。かゝる非連續の連

續として現在の内に無限に現在を限定し行く、點から點に移る時を包んだ直観的過程と考へられるものは、一面に於て我々の形成作用と考へるものである。斯く藝術的直観は形成作用と考へられ、我々の個性的自覺と考へられるものも、かゝる意味を有つが故でなければならぬ。かゝる意味に於て、我々は行為によつてイデヤを見ると云ふこともできるのである。無限に現在の内に現在を限定する現在の内容と考へられるものは、瞬間的限定を停止することによつて見られる知識内容として限定することはできない、情意の内容は知識的限定に對して非通約的と考へられる所以である。歴史といふ如きものは、何處までも所謂客觀的知識といふ如き意味を持つことはできない。

私が私自身を知るといふことが、以上述べた如く直観といふ意味を有つて居るとするならば、人と人との直接の關係として私が汝を、汝が私を知ると云ふには、そこに直観と考へられるものがなければならぬ。直観といふのは通常、藝術的直観を典型として考へられる如く、我々が直に物と合一するといふことではない、自己自身の底に絶對の他を蔵し、自己が自己の底から他に轉じ行くといふことでなければならぬ、自己と他とが一となるといふのではなく、自己の中に絶對の他を見るといふことでなければならぬ。それは考へることのできない矛盾であらうが、斯くして絶對の否定、絶對の死によつて生きるといふ眞の辯證法的運動といふものが考へられ、無媒介的に一より他に移るといふ眞の内的推移といふものも考へられるのである。我々の自覺の事實といふものが考へられるかぎり、

かゝる限定が考へられねばならない。見るものと見られるものとは固、絶対に異なるものでなければならぬ、それが一であるといふのは右の如くにして考へられねばならない。斯くして見るものなくして見るといふことも考へられるのである。かゝる自覺的限定に於て私と汝とは如何なる關係に於て立つて居るか、私が汝を知り汝が私を知るとは何を意味するか。私は直観といふことを自己が自己を知るといふことから考へた、そして自己が自己を知るといふことは自己に於て絶対の他を認めることであると云つた。併しかゝる關係は直に之を逆に見ることができる。自己が自己の中に絶対の他を認めることによつて無媒介的に他に移り行くと考へる代わりに、かゝる過程は絶対の他の中に私を見、他が他自身を限定することが私が私自身を限定することであると考へることができる。私が内的に他に移り行くといふことは逆に他が内的に私に入つて來るといふ意味を有つてゐなければならない。自己自身の内に絶対の他を見ると考へられる眞の自覺といふものは、社会的でなければならない。人と人との空間的關係によつて基礎付けられてゐなければならない。私と汝とは各自の底に絶対の他を認め、互に絶対の他に移り行くが故に、私と汝とは絶対の他なると共に内的に相移り行くと云ふことができる。私と汝とは互に辯證法的關係に立つのである。故に私は私の人格的行爲の反響によつて汝を、汝は汝の人格的行爲の反響によつて私を知るのである。我々が各自の底に絶対の他を認め互に各自の内から他に移り行くといふことが、眞に自覺的な人格的行爲と考へられるものであり、かゝる行為に

於て私と汝とが相触れるのである、即ち行為と行為との應答によつて私と汝とが相知るのである。私は私の表現の類推によつて汝を知るといふ如き考の支持し難きは云ふまでもなく、私は汝の表現に没入することによつて汝を知るのでもない、所謂感情移入によつて汝を知るのでもない。私は汝が私に應答することによつて汝を知り、汝は私が汝に應答することによつて私を知るのである。私の作用と汝の作用とが合一することによつて私が汝を知り汝が私を知るのではなく、互に相對立し相應答することによつて相知るのである。そこにはいつも作用と反動との如き關係がなければならぬ、所謂直覺と考へられるものとは全然異なつた意味がなければならぬ。普通に直覺的に私が汝を知ると考へられる場合、かゝる意味が明にせられていないと思ふ。私が汝の情緒に移入することによつて、私が汝を知るのではなく、私といふ人格が汝といふ人格に直に應答することによつて私が汝を知るのである。故に私は汝と同感することによつて汝を知るよりも、寧ろ汝と相争うことによつて一層よく汝を知ると云ふことができる。而して斯く應答によつて私が汝を知り汝が私を知ると考へられると共に、汝の應答なくして私は私自身を知ることはできない、又私の應答なくして汝は汝自身を知ることはできないと云ふことができる。自覺に於て自己の中に絶対の他を見、他が自己の意味を有つと云ふ時、我々に對し絶対の他と考へられるものは自己自身を表現するものの意味を有たなければならない、かゝる關係の底には人と人との關係がなければならない。而して人と人との關係といふことは話し合ふと云

ふことでなければならない、互に應答するといふことでなければならない。私が他人の思想感情を知ると云つても單に私と他人とが合一するといふことではない、私の意識と他人の意識とは絶対に他なるものでなければならない。私の意識は他人の意識となることはできないといふ意味に於ては、私は絶対に他人の意識を知ることにはできない。絶対に對立するものの相互關係は互に反響し合う、即ち應答するといふことでなければならない。何處までも獨立に自己自身を限定するものが、自己限定の尖端に於て相結合するのが應答といふことである、そこには所謂自他合一と正反對の意味がなければならない。所謂宇宙的感情といふ如きものに於て人は大宇宙と合一すると考へられる。併し單に我が宇宙と合一し之に没入すると考へるならば、我といふものはない。斯く考へれば單なる無意識と捉ふ所がない（万有神教の弱點は此にあるのである）。そこに大宇宙を一つの人格として之と話し合ふといふ意味がなければならない。我々は無意識となることによつて大宇宙と合一するのではなく、我々の人格的自己限定の尖端に於て宇宙的精神と面々相接するといふ意味でなければならぬ。藝術的直觀の如きものに於ても、我に對するものは單なる物といふものではなくして、自己自身を表現する意味を有つたものでなければならない。單なる質料と考へられるものも單なる質料ではない、既に何等かの意味に於て形相の意義を有つたものでなければならない。加之、彫刻家が一刀一刀と刻み行くに當つて、彼に對するものは單なる質料といふ如きものではない。彼の主觀的自己に對して立つものは客觀

的精神といふ如きものでなければならない、彼は一刀一刀と刻み込むことによつて之を見て行くのである。藝術的作品と考へられるものは、單に藝術家の主觀的想像の寫眞ではない、彼は一刀一刀と客觀的精神に話しかけて行くのである。斯くしてフィードレルの如く藝術的創造作用に於て働くことが見ることであり、見ることが働くことであると思へることができる。藝術的創造作用の底にも、人格と人格との應答といふ如き意味がなければならない。我々が自己に於て他を見ると考へる時、我に對するものは自己自身を表現するものといふ意味を有つと云つたが、同時にそれが我々の自己を自己として限定するといふ意味に於て、それが直覺的と考へられるものでなければならぬ、内より我を限定する、即ち外が内であるといふ意味を有つてゐなければならぬ。絶対の他と考へられるものも、それが自己に於て見られると考へられるかぎり、それは直覺的といふ如き意味を有つてゐなければならぬ。それは何處までも他として外的と考へられると共に、既に何等かの意味に於て表現的意義を有つてゐなければならぬ、既に他の人として私を限定する意味を有つてゐなければならぬ。感覺的なものに於ても、既に自己に於て他を見、自己が他によつて限定せられると共に他を限定するといふ辯證法的自覺の意義を含んでいるのである。感官的なものの背後に考へられるものは、普通に考へられる如き物質といふ如きものであつてはならぬ。所謂物質といふ如きものから感覺といふものが出るのではない、逆に感覺的なものの辯證法的限定として所謂物質といふ如きものが考へられるのである。感

官的限定と考へられるものの底にも、既に人格的限定の意味がなければならない。普通には人格の根柢を理性に置くことによつて、感官的限定と反對の方向に人格的自己を考へるが、眞の人格的自己とは辯證法的實在として非合理的なるものの底に考へられるものでなければならない。絶對否定の辯證法に於て、自己の中に絶對の他を見るといふことは同時に絶對の他の中に自己を見るといふことでなければならぬ。併しそれが自己に於て他を見ると考へられるかぎり、その他と考へられるものはノエマ的に自己に對する相對的他と考へられ、自己が他を限定すると考へられると共に、他が自己を限定すると考へられる。而してその他と考へられるものが絶對の他として感覺的とか物質的とか考へられると共に、その根柢に固、人格的意義を有するを以て、自他の相互限定の間に種々なる關係が成立すると考へることができる。自己の中に單なる絶對の他を見ると考へられる時、單なる感官的世界所謂物質界といふものが考へられる、而して自己はかゝる他から限定せられるものとして感官的自己といふものが考へられる。併しかゝる他の限定が固、辯證法的としてその根柢に於て人格的と考へられる時、所謂生命の世界といふ如きものが考へられる。單なる他と考へられるもの、即ち感覺的なるものは、生命の手段と考へられると共に、自己は他から限定せられるといふ意味に於て衝動的自己といふ如きものが考へられる。自己に於て單に絶對の他を見るといふ時、單なる物質一元論的世界が考へられるが、是に於ては既に内からの限定と外からの限定との相關の意味に於て辯證法的世界が考へられ

るのである。種々なる本能と考へられるものはかゝる意味に於て解すべきである。動物の本能には何らの目的も自覺も伴わない、その根柢に於て不可知的なるものがなければならない。而もその不可知的なるものに於て他が自己であり自己が他であるといふ辯證法的意義がなければならない。加之、一つの動物の生命はその動物だけのものではなくして、大なる生命の連鎖における一の環として考へられねばならぬ。而して生物の親と子とを媒介するものも、又感官的と考へられるものでなければならない。そこには外が内であり内が外であるといふことがなければならない。動物が本能的直覺に於て對象に對して感ずるものは如何なるものであらうか。それは、我々の情意的内容といふ如きものでなければならない、云はば我々の表現の内容とか人格的内容とかいう如き意味を有つたものと考へることもできるであらう。併し自己に於て單なる他を見、そして又單なる他から限定せられると考へられるかぎり、それは何處までも私の所謂有の限定といふべきものであつて、それによつて人格的世界を認めるといふことはできぬ、従つて本能的に私が汝を知り、汝が私を知るといふ如きことは云はれない。無論、如何なる動物も本能的に群をなし、個々の動物間には我々の友情に類するものを見ることができるであらう。併し動物間には私に對する汝といふものはない。もし動物が哲學的に思索するならば彼は獨我論を主張するであらう。自己に於て單なる他を見ると考へる時、他が自己を限定するといふ意義に徹底すれば唯物論に陥るのほかなく、自己に於てといふ意義に徹底すれば獨我論に陥るの外ない。

子供は本能的に母を認め、我々は本能的に他人の表情を感じると考へられるであらう。我々が今日社会的感情と考へるものも、發生論的に種々なる本能から發展し來つたものと云ふことができるであらう。そしてその底には、何等かの意味に於て對他人的直覺といふものがあると考へることもできるであらう。併し我々はかゝる意味に於て本能的に他人を直覺するのではない。本能的直覺と考へられるものは却つて我々の人格的關係を消すと考へることもできる。私が汝を直覺し汝が私を直覺するといふのは、その間に何處までも客觀的限定の意義があるのではない、外の媒介によるのではない。私は汝の呼びかけによつて汝を知り、汝は私の呼びかけによつて私を知るのである。物が汝の呼聲となるのである、物が我々の呼びかけることによつて私は汝を知り汝が私を知るのである。否、私が私自身を知るといふにも、物が私に呼びかけるといふことがなければならない。我々が自己に於て見る感覺的なものが、他として私に呼びかけることによつて、私は私自身を知ると云ふことができるのである。自己が自己に於て絶對の他を見ると考へる時、我々の自己は死することによつて生きるといふ意味を有し、他の人格を認めることによつて自己が自己となる、私の根抵に汝があり汝の根抵に私があると云ふことができる。かゝる辯證法的限定に於ては私に於て見る他と考へられるものは、單なる他ではなくして汝の呼聲の意味を有つていなければならない。すべて表現と考へられるものはかゝる意味を有つたものでなければならぬ。表現といふのは我に於て我に對して見られる他といふべきもので

あつて、而もその背後に他の呼聲の意味を有つたものでなければならぬ。自己の底に絶對の他を認めることによつて内から無媒介的に他に移り行くといふことは、單に無差別的に自他合一するといふ意味ではない、却つて絶對の他を媒介として汝と私とが結合するといふことでなければならぬ。自己が自己自身の底に自己の根抵として絶對の他を見るといふことによつて自己が他の内に没し去る、即ち私が他に於て私自身を失う、之と共に汝も又この他に於て汝自身を失わなければならない、私はこの他に於て汝の呼聲を、汝はこの他に於て私の呼聲を聞くといふことができる。斯く我々がそれに没入することによつて自己を見ると考へられる絶對の他の立場に於て、逆に私と汝とを限定する客觀的精神といふものが考へられる。我々が社会的に限定せられるといふ時、かゝる客觀的精神といふ如きものによつて限定せられると考へられるのであるが、私と汝とはかゝるものを媒介として相知るといふのでもない。客觀的精神と考へられるものは、尚我々が内に絶對の他に撞着し絶對の他の中に没入することによつて聞く自己自身の聲と考へることができる。それに於て眞に人格と人格とが相對すると云ふことはできぬ、他に於て直に汝の聲を聞くといふことはできぬ。それは未だ眞に内に絶對の他を見るといふものではない、眞に點から點に移る辯證法的限定といふものではない。従つてかゝる限定によつて眞の個人的自己は呼び起されない、單なる社会的限定は個人的自己を否定するとも考へられるのである。個人的自己は唯、個人的自己によつて呼び起されるのである、個人的自己を呼び起

すものは又個人的自己でなければならぬ。私は絶対の他なる汝を媒介として私自身を知り、汝は絶対の他なる私を媒介として汝自身を知るのである、私と汝との底には辯證法的直観の意義がなければならない。

我々は内部知覺によつて自己自身を知ると考へる。併し昨日の私と今日の私とが直接に結合して、我々の人格的統一といふものが考へられる時、それは何等かの對象的連續によると考へることはできない。もし對象的限定によつて両者が相結合すると考へられるならば、眞の人格的自己といふものはない。かゝる直覺的結合と考へられるものの底に、非連續の連續として既に辯證法的限定といふものが考へられねばならない。我々の記憶と考へられるものに於ても、各瞬間の意識と意識とが話し合ふといふ如き意味がなければならぬ。意識が志向的であるといふことが既に意識は存在として自己否定を含んでいるといふことができるであらう。併し我々の意識統一と考へられるものは、單なる意味の統一と考へられるものでもなければ、單に受働的な感覺の連續といふべきものでもない。それを作用と作用との連續と考へるとしても、さういふものは對象的に見られるものではない、見られるならば自己といふものではない。我々の人格的自己の意識統一といふものが考へられるには、現在の意識そのものの底に無限の深さといふものが考へられねばならぬ、何處までも言表し得ざるものがなければならぬ。而もそれは何處までも自己自身を言表すると考へられるものでなければならぬ。加之、そ

6-400

れは現在の意識を否定して次の現在意識に轉ずるといふ意味を有つたものでなければならぬ、即ちそれは自己自身の底に絶対の他を含むと考へられるものでなければならぬ、かゝる限定の底には絶対の他といふものがなければならぬ。かゝる辯證法的限定に於て始の點と終の點とが結合すると考へられるかぎり、一つの個人的自己の意識統一といふものが考へられるのである。併しかゝる限定に於ては固、過去が未來を限定するといふのでもなく、さればと云つて單に未來が過去を限定するとも考へべきでない。それは唯、現在が現在の底に自己自身を限定するといふことから考へられるのである、即ち瞬間が瞬間自身を限定するといふことから考へられるのである。斯く考へられるには、さういふ瞬間といふものに、時を内に越えたものといふ意味がなければならぬ。かゝる自己自身を限定する瞬間といふものが、意識統一として我々に自己と考へられるものであり、又かゝる瞬間の自己限定として瞬間から瞬間に移り行く時の流といふものが考へられるのである。我々の意識統一として一つの自己と考えられるものがかゝる意味を有つたものとするならば、かゝる自己を限定するものは何處までも所謂時に於てあるものの内に求めることはできない、即ちノエマ的方向に求めることはできない。却つて之を逆の方向に求めねばならない。即ち時を包み時を内に限定する永遠の今の自己限定に求めねばならない、時そのものを限定する空間的なものに求めねばならない。私を限定するものは汝でなければならぬ、自己自身を限定する瞬間と考へられるものは、瞬間から瞬間に移り行く時

によつて限定せられるのではなく、更に自己自身を限定する瞬間に對して限定せられるのである、個物は唯、個物に對して限定せられるのである、私の生れる時、汝がなければならない。自己自身を限定する瞬間と考へられるものは、過去から限定せられるのでもなく未來から限定せられるのでもない、現在に於て現在が限定せられるといふ意味に於て限定せられるものでなければならない。現在に於て現在が限定せられるといふことは、限定するものなき限定として、私の所謂無の一般者の限定として、個物と個物とが相限定するといふことでなければならない、個物が自己自身の中に絶對の他を見るといふことでなければならない。個物が個物自身の底に絶對の他を見るといふことは、自己自身の底に絶對に自己自身を否定するものに撞着するといふ意味を有つてゐなければならない。かゝる意味に於て絶對の他と考へられるものは、私を殺すといふ意味を有つて居ると共に、我々の自己は自己自身の底にかゝる絶對の他を見ることによつて自己であるといふ意味に於て、それは私を生むものでなければならない。自己が自己の底に絶對の他を見るといふことによつて、無限の過去から我々を限定する因果的な時の流といふものが考へられ、逆にそれが自己自身を生むものであるといふことによつて、無限の未來から我々を限定する合目的的な時の流といふものが考へられる。併し絶對の否定即肯定の立場からは、永遠の今の限定として即ち直觀的限定として、自己自身を限定する現在といふものが考へられる、現在が現在の中に無限に現在を限定し行くと考へることができる。無限なる時の流と考

へられるものは却つてかゝる限定の過程的影像と考へることができる。自己自身の底に絶對の他を見ると考へる時、我々は之に没入することによつて生きると考へられねばならぬ。併し單に斯く考へることによつて、我々の個人的自己といふものが成立するのではなく、之に於て他の聲を聞くといふ意味がなければならぬ。かゝる意味に於て、私も汝も我々を媒介すると考へられる絶對の他に没入すると共に、そこから生れると考へることができる。我々が過程的と考へる辯證法的限定の底に、一即多の辯證法的直觀といふものがなければならない、一即多なる空間的意義がなければならない。絶對に獨立なるものとして話し合ふ人と人との底に、直接に相見るといふ意味がなければならない。かゝる意味に於て個物が直に個物を限定する、私が汝を限定し汝が私を限定すると考へられるが、かゝる限定を、自己自身を限定すると考へられる個物の立場から見れば、それは絶對の他として何處までも外から我々を限定すると考へられねばならない。それは我々を内から限定する即ち時間的に我々を創造すると考へられると共に、我々を包み我々を自己自身の中に限定する大なる時の流と考へられるものでなければならぬ。我々が自己自身の底に絶對の他を見ると考へる時、無数なる時の流といふものが考へられる、各人が各人の時を有つと考へられる。併しこれを逆に我々が自己の底から絶對の他によつて限定せられて居ると考へることができる。而して辯證法的に我々はかゝる絶對の他に没入することによつて生きると考へる時、永遠の今の自己限定と考へられるものは大なる時の流といふ如きもので

なければならない。そこに客觀的時といふものが考へられる、各人の有つ各人の時は絶對時によつて限定せられて居ると考へることもできる。自覺的限定の立場から各人が自己自身を限定し各人が各人の時を有つといふことは、逆に絶對時によつて限定せられるといふ意味を有つてゐなければならない、絶對時によつて無限なる時が限定せられると考へられねばならない。現在が現在の中に現在を限定するといふことは斯くして考へられるのである、現在が自己自身の中に自己自身を流動的に限定すると考へることができる、時を包む時の空間的限定、時の外延的限定といふ如きものが考へられる。一即多といふ辯證法的直觀の立場からかゝる限定が考へられねばならないのである。かゝる限定に於て時の始と終とが結び付くと考へられるかぎり、自己自身を見る自己といふものが考へられるのである、現在の中に限定せられた現在といふ如きものが自己と考へることができる。永遠の今の限定として之に於てあると考へられるものとして、即ち自己自身の底に絶對の他を見るといふ自覺的限定によつて限定せられたものとして歴史に於てあると考へられるものは、すべて一面に於ては絶對の時の流に於てあり、之によつて限定せられると考へられなければならない。併しそれと共に一面に私と汝とが互に絶對の他であるといふことは私と汝とを他より限定するものなきことを意味し、我々は一即多として辯證法的に結合して居ることを意味するが故に、現在が現在自身を限定するといふ意味に於て、歴史に於てあるものの底にはいつも時を包み、時を限定するものが考へられねばならない。かゝる時の

逆限定と考へられる立場に於て、時の始と終とが結合すると考へられる自覺的自己といふものが考へられるのである。云はば、過程的辯證法的限定に對して直觀的辯證法的限定の立場から自覺的存在といふものが限定せられるのである。無論、かういふ二つの辯證法があると云ふのでなく、それは辯證法の両面といふべきものであるから、すべて歴史に於てあるものは一面に於て自覺的であり即ち自己といふ意味を有すると共に、一面に無限なる時の流に於てあると考へられねばならぬ。過去無限から未來無限に向かつて流ると考へられる絶對の時と考へられるものも、永遠の今の限定として無限の果に於て始と終とが結び付くと考へられるならば、それも一つの大なる自己と考へることもできる。之に反し、瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる瞬間的限定の尖端に於て過去と未來とが結び付くと考へられる時、我々の個人的自己といふものが考へられるであらう、而してその間種々なる意味に於て種々なる自己といふものが考へられるであらう。辯證法的直觀の立場からは、時の流といふのは圓の中に圓を限定し行くとも考へることができる、到る所中心となり周邊なき圓の自己限定と考へることができる。要するに、種々なる意味の自己といふものが考へられるのは、自覺的限定に於て我々が自己の中に見ると考へる「他」の意味によるのである。前にも云つた如く、本能的自己とか社会的自己とかいう如きものの意味は、かゝる意味に於て考へられる「他」と自己との關係によつて定まるのである、一即多の直觀的限定の立場から考へられるのである。かゝる直觀的自己の自己限定が形成作

用と考へられるものであり、社会的自己と考へられるものは形成作用の意義を有つと云ふことができる。唯、眞に一即多として内に絶対の他を見ると考へられる時、それが神の社会的限定と考へられるものであり、そこに個人的自己と個人的自己とが直に相見ると考へることができる。個人的自己は唯、かゝる意味に於て個人的自己によつて呼び覺されるのである。斯く我々の世界と考へられるものが、その根抵に於て我々が自己の底に絶対の他を見、逆に絶対の他に於て自己を見るといふ如き人格的自覺によつて基礎付けられて居るとするならば、我々の知識と考へるものの底には、事實が事實を限定するといふ意味があり、私と汝とが話し合ふといふ意味があると考へることができる。私が自己の中に絶対の他を見ると考へる時、私に對するものは自己自身を表現するものとなり、そこに既に私と他とが話すといふ如き意味がなければならない。而してその他が汝であるといふ時、私と汝と話し合ふものは、單なる表現の内容といふ如きものではなくして、私が私の自己限定としての事實を、汝は汝の自己限定としての事實を話し合ふといふことができる。瞬間的限定の内容として考へられる事實と事實との結合には自己の内に絶対の他を見るといふ意味がなければならぬ。すべてツッゲングリッヒとかフェルステーンとかいうことは、自己の底に絶対の他を見るといふ人格的自覺の立場から考へられるのである。私が汝を見ることによつて私であり、汝は私を見ることによつて汝であるといふ立場から、絶対に非連続的なものの連続として話し合ふといふことが考へられ、そこに事實と事實とが

直接に結合すると考へられるのである。而して個人的自己ならざるものの内容、一般的自己の内容と考へられるものについても、それが自覺的なものの内容と考へられるかぎり、それに對し了解といふ如きことを云ひ得るのである。單なる一個人の自己限定として事實といふものは考へられない、獨我論的立場に徹底すれば眞の事實といふものはない。内部知覺の事實と考へられるものであつても、非連続の連続として人格的自己の自己限定として考へられるのである。而してかゝる人格的自己と考へられるものの根抵には汝といふものがなければならない。事實の世界は私と汝とが直接に相對し相話すといふことから始まる、すべて實在界と考へられるものは此に基礎付けられねばならぬ。デカルトのコギト・エルゴ・スムにも、單なる内部知覺といふ如きことを離れて自己の内に絶対の他を見、事實が事實自身を限定するといふ意味がなければならない。記憶といふものなくして個人的自覺といふものはない。併し記憶に於て前の我と後の我と直接に結合すると考へられる時、既に我と我とが話し合ふといふ意味がなければならない。かゝる意味に於てアウグスチヌスの如くすべてのものが記憶に於てあると考へることができる、忘れるといふことも記憶に於てあると云ふことができる。以上述べた如くなるを以て、我々が何等かの對象的限定を通じて他の自己を知ると考へられる代りに、私と汝とが絶対の他として直に話し合ふといふことから對象界といふものが考へられると云ふことができる。私が私の自己の中に絶対の他を見るといふことは、逆に私が絶対の他を見ることによつて私が私

自身を見るといふことを意味し、かゝる意味に於て我々の個人的自覺といふものが成立するのである。かゝる個人的自覺の立場から、自己の中に他を見るといふ意味に於て何處までも他を自己の中に見ると考へ行くことができるであらう、宇宙をも包むと云ふことができるであらう。併しかゝる方向に於て何處まで行つても汝に達することはできない、汝が私にツウゲングリッヒとはならない。かういふ方向に於て見られた世界と考へられるものは、何處までも主観的世界に過ぎない。何等かの意味に於て自己自身を限定する瞬間を止めることによつて見られた世界である。眞の實在界と考へられるものは、瞬間が瞬間自身を限定することによつて時が成立すると考へられる瞬間的限定の底に於て、私と汝とが相見、相話す所に成立するのである。それは原始歴史的でなければならぬ、自然科学的世界も此に基礎付けられるのである。私と汝とが絶対の他であるといふ意味に於て汝の意識は私の意識ではない、私は汝の意識内容を知らない。併しかゝる意味における意識としては汝も私も實在ではない。私と汝とは自己の中に絶対の他を見るといふ人格的自己に於て、直接に相對し相見するものとして互に實在的であるのである。我々は普通に對象的なものを直接に知り、間接に汝を知ると考へて居るが、すべて我々の知識と考へるものは表現の内容といふ意味を有つてゐなければならない、自覺的な表現的内容ともいふべきものが知識と考へられるものである。そして表現的限定の自覺と考へられるものは自己の中に絶対の他を見るといふことでなければならない。我々の知識と考へるものの底には、

6-408

汝といふものが含まれてゐなければならない。我々はいつでも三つの方向に於て自己を越えたものに對立して居る、物と考へられるもの、汝と考へられるもの、超越的我と考へられるものがそれである。併しこれらのものは固、別々のものではなく、具體的知識の契機として之に含まれて居ると云ふことができる。即ち自己の中に絶対の他を見るといふ人格的自覺はかゝる三つの對立を含むと考へることができるのである。

四

我々の眞の自己と考へられるものは人格的でなければならない、單に身體的と考へられるものは眞の自己ではない。無論、何らの身體的欲求なくして自己といふものはない、人格といふものすら廣義に於ての身體性なくしては考へられない。併し我々の自己の底に單に身體といふものを考へるならば、自己といふ如きものは考へられないのみならず、我々が單なる身體的欲求に従うことは却つて我々の自己を否定すると考へられる。加之、我々の欲求と考へられるものは固、それ自身の中に矛盾を含んだものと云ふことができる。欲求が自己自身を満足することは欲求が自己自身を消すことであり、欲求は死すべく生れると云ひ得ると共に、欲求は又生命の欲求として生れるべく死すると云ふことができる。然らばと云つて、我々の人格的自己と考へられるものが單に理性的といふのでもない。單に理

性的なるものは實在的と考へられないのみならず、單に合理的となるならば我々の自己といふべきものではなくなる。我々の人格的自己と考へられるものは何處までも個物的でなければならない、一般的なる自己といふものはない。我の自己の底には何處までも非合理性がなければならぬ、自由意志がなければならない。我々の人格的自己と考へられるものは何處までも非合理的なると共に、合理的と考へられるものでなければならぬ。我々の自己といふのは空間的・時間的な此實在界を離れて存在するのではない、何處までも環境的に限定せられたものでなければならない、我々は歴史に於てあるのである。而も我々の自己はかゝる意味に於て限定せられたものであつてはならぬ、何處までも之を越えるものでなければならない。かういふ意味に於てそれは理性的であると思ふことができる、空間的・時間的限定を離れて一般的法則によつて動くと思ふこともできる。併し單にさういふ意味に於て空間的・時間的限定を越えるといふのでなく、我々の自己はかういふ法則をも越えるといふ意味において非合理的でなければならぬ。斯くして自由なる人格的自己といふものが考へられるのである。かういふ意味に於て我々の自己と考へるものは如何に考ふべきものであらうか。如何にしてかゝるものが考へられ、如何にしてかゝるものが有ると云ひ得るであらうか。私は上に云つた如く我々が自己に於て絶對の他を見、逆に絶對の他に於て自己を見るといふ意味に於てのみ、かゝる自己が考へられるのであると思ふ。無論、さういふものを考へることは不可能とも云はれるであらう、自家撞着とも

考へられるであらう。併し辯證法といふものが固、かゝる意味を有つたものであり、すべて具體的實在と考へられるものは辯證法的に自己自身を限定するものでなければならない。判断的知識といふものが成立するにも、判断的一般者が自己自身の底に自己自身を越えたものを見るといふことがなければならない、即ち無の一般者の自己限定として判断的知識といふものが成立するのである。個物が一般を限定し一般が個物を限定するといふ辯證法的運動も、かゝる意味に於て考へられなければならない。

すべて我々が實在的知識と考へるものは何等かの意味に於て非合理的なるものの合理化の意味を有つてゐなければならない、單に非合理的なるものは我々の知識と何の交渉もない。感覺的なものは全然非合理的と考へられる。併し感覺的なものも意識せられると考へられるかぎり、それは私に於てあるものと考へられねばならない。そして又逆に我々の自己は感覺的なものによつて限定せられると考へられねばならない、斯くして感覺的なものも辯證法的と云ふことができるのである。我々の欲求と考へるものも、かゝる意味に於て辯證法的と考へられなければならない。欲求の對象と考へられるものは我々の外にあると考へなければならぬのみならず、欲求そのものも我々の自己意識の外から起ると考へられねばならない、欲求の底に衝動とか本能とかいうものが考へられるのである。併し与えられたものは固、求められたものであると考へられる如く、況して欲求の對象と考へられるも

のは我々によつて求められたものとして有ると云ひ得るのである。又欲求の底には何處までも深い非合理的なるものがなければならない、然らざれば我々の自己は實在的とは考へられない。而も單に斯く考へられるならば自己といふものはない、かゝる考を徹底すれば遂に自己を物質に歸する外はない。欲求に於ては單に非合理的なるものが我々を限定すると云ふのではなく、非合理的なるものが即自己と考へられるものでなければならない、外と考へられるものが内と考へられるものでなければならない。斯く我々は欲求的自己に於ては云ふまでもなく、感覺的自己といふ如きものに於てすら、既に自己に於て他を見るといふ意味が含まれて居ると考へなければならず、我々の感覺的世界と考へられるものはかゝる意味に於て有ると考へられるものでなければならぬ。併し我々は何處までも欲求的自己とか感覺的自己とかいうものとして、人格的自己といふものを考へることはできぬ。かゝる意味に於ては、我々が何處までも眞に他を自己に於て見るといふことはできぬ、我々は尚他に於てあるのである、他によつて限定せられて居るのである。要するにそれは自己の底に非合理性を見るのみである、それからは我々の知的自覺と考へるものすら出て來ない。欲求的自己とか感覺的自己とか考へられるものに於ては、自己に於て他を見るのではなく他に於て自己を見るのである。而も單に他に於て自己を見たと考へられる時、自己といふものはない。我々は所謂自覺的自己と考へられるものに於て、始めて自己に於て他を見たと云ふことができる。我々は自覺に於て自己が自己を見たと考へる、見るもの

と見られるものとが一となると考へるのである。併し對象的限定の意味に於ては、かゝることは實際不可能でもあり、又考へられぬことである。かゝる自覺といふものが考へられるには、我々は自己自身の中に自己を見て行く無限の過程といふものが考へられねばならない、一般者が自己自身の中に何處までも自己を限定して行くと考へられねばならない。而もかゝる無限なる過程の尖端が何處までも自己に於てある、即ち極限が一般者に於て含まれるといふことによつて、所謂自覺といふものが考へられるのである。見るものに對して見られるもの、主に對して客と考へられるものは、何處までも他と考へられるものでなければならない、絶対に他と考へられるものでなければならない。而もそれを何處までも自己に於て見るといふ意味に於て自覺的自己といふものが考へられるのである。それに於ては、非合理的なるものが合理的であり、外が内であると云ふことができる。翻つて考へれば、嚮に欲求的自己とか感覺的自己とか考へられたものも、その實かゝる自覺的自己の立場から考へられるものでなければならない。前者から後者が考へられるのではなく、後者から前者が考へられるのである。それ故に、私はカント哲學の如き立場に於て始めて眞に自己自身の中に他を見るといふ自覺的自己といふものを考へることができると思ふ。自然といふものが唯一の實在としてすべてのものの底に考へられた時、我々は自覺的自己といふ如きものを考へることはできない。自覺的自己の實在性といふものが考へられるには、自然は純我の綜合統一によつて構成せられるといふ如き立場がなければならな

い、客観性といふものが單に自己の外に見られるのではなく内に見られるといふ意味がなければならぬ。かゝる立場からコヘンの如く与えられたものは求められたものであると考へることもできるのである。眞に自覺的といふべき人格的自己といふものが考へられるには、カント哲學の如き立場を通らなければならない。自然の底に自己を認めることによつて、自己の底に絶對の他を認めることによつて、自由なる人格的世界の可能性が開かれるのである。併し唯それだけにて自由なる人格といふものは考へられない、意識一般は自由なる人格ではない、カントに於て自由は要請たるに過ぎない。縦、意識一般に代へるに純粹意志の如きものを以てしても、我々の個人的自己の自由といふものは考へられない、而して個人的自由といふものがなくして自己といふものはない。すべて我々の客観界と考へるものの根柢に、形而上學的自己といふ如きものを考へるならば云ふまでもなく、純我の綜合統一といふ如きものを認めるとしても、それからして個人的自己といふものは考へられない。單なる一般者の自己限定として個物といふものが考へられない如く、一般的自己の自己限定として個人的自己といふものは考へられない。我々の自己と考へるものは誰かの自己でなければならぬ、何人の自己でもない一般的自己といふ如きものは、自己として考へられないのである。我々は所謂自覺的自己の立場に於て自己に於て自己自身を見ると考へる、即ち自己に於て自己を限定するものを見ると考へる。自己に對し自己を限定するものは對象と考へられるものであり、右の如く考へることは自己に於て對象を見

るといふことであり、自己に於て他を見るといふことを意味する。かゝる意味に於て自己が自己の中に何處までも對象を見て行く、即ち他を見て行くといふことは我々の自己といふものが何處までも深められ廣げられて行くといふことを意味する。かゝる限定の極限に於て我々が絶對の他を見ると考へる時、超越的自己といふ如きものが考へられる（カント哲學では感覺といふ如きものが絶對の他との接觸點と考へることができる）併しその實、我々は此に於て避け難い二者択一に撞着するのである、一種のディレンマに陥るのである。絶對の他が自己に於てあると考へれば、それは絶對の他といふものではない、要するに他力といふものはなくなる。斯く他といふものが無くなると共に、始何處までも自己自身の中に自己を限定する我々の自覺的自己と考へられたものは、その根柢に於て理性といふ如きものと考へるの外なく、自己自身の底に何處までも非合理的なるものを蔵する眞の個人的自己といふものの意味は消されねばならない。然らばと云つて、我々の自己が自己限定の極限に於て絶對の他に於てあり、他によつて基礎付けられて居ると考へるならば、尚更自己の實在性といふものは考へられない、要するに一種の唯物主義に陥るの外はない。それでは、我々が自己自身の底に見る絶對の他と考へるものを如何に見ることによつて、眞の自覺の意味が成立し、人格的自己といふものが考へられるであらうか。その他と考へられるものは、唯物論者の云ふ如き單なる他であつてはならぬ、又唯心論者の考へる如き大なる自己といふ如きものであつてもならぬ。それは絶對に他なると共に私

をして私たらしめる意味を有つたものでなければならぬ、即ちそれは汝といふものでなければならぬ。私に對して汝と考へられるものは絶對の他と考へられるものでなければならぬ。物は尚我に於てあると考へることもできるが、汝は絶對に私から獨立するもの、私の外にあるものでなければならぬ。而も私は汝の人格を認めることによつて私であり、汝は私の人格を認めることによつて汝である。汝をして汝たらしめるものは私であり、私をして私たらしめるものは汝である。私と汝とは絶對の非連續として、私が汝を限定し汝が私を限定するのである。我々の自己の底に絶對の他として汝といふものを考へることによつて、我々の自覺的限定と考へるものが成立するのである。斯く私が私の底に汝を見、汝が汝の底に私を見、非連續の連續として私と汝とを結合する社会的限定といふ如きものを眞の愛と考へるならば、我々の自覺的限定と考へるものは愛によつて成立するといふことができるであらう。我々は普通に所謂内部知覺といふ如きものによつて自己自身を直覺すると考へる。併し我々の個人的自覺といふのも、單にかゝる意味の直覺に於て成立するのでなく、自己自身の中に自己を見て行く無限の過程でなければならぬ、而してその底に絶對の他を見るといふ意味を有つてゐなければならぬ。今日の私は昨日の私を汝と見ることによつて、昨日の私は今日の私を汝と見ることによつて、私の個人的自己の自覺といふものが成立するのである、非連續の連續として我々の個人的自覺といふものが成立するのである。その一步一步が絶對の無に接してゐなければならぬ、その根抵にい

つも汝がなければならぬ。永遠の今の自己限定として時が瞬間から瞬間に移るといふ如き意味に於て我々の自覺的限定が成立するのである。

斯く我々が我々の底に絶對の他と考へるものが汝であるとするならば、我々を對象的に限定すると云ふべきものは、一般的自己といふ如きものでもなければ自然といふ如きものでもない、それは歴史といふ如きものでなければならぬ。自己の底に絶對の他を見ることによつて自己が自己となると考へられる人格的自己といふものは何處までも歴史的に限定せられたものでなければならぬ、我々は歴史的一般者の自己限定として限定せられるのである。我々が自己の中に絶對の他を見ると考へる時、自己に對するものは單なる存在ではなくして自己自身を表現するものでなければならぬ、廣義に於てそれは汝といふものでなければならぬ。而して私は私の行為によつて汝を限定し、汝は汝の行為によつて私を限定するのである。我々の個人的自己が自己自身の底に見る非合理性と考へられるものは、單なる自然の非合理性ではなくして、歴史の非合理性でなければならぬ、汝の非合理性でなければならぬ。感覺的と考へられるものも、かゝる意味に於て自己自身を表現するものであり、かゝる意味に於て我々を限定すると云ひ得るのである。我々の身體と考へられるものも固、歴史的事物の意義を有つたものであり、我々の欲求と考へられるものも歴史的要求の意義を有つたものでなければならぬ。斯くして眞に欲求なくして自己といふものがないと云ひ得るのである。之と共に自覺的限定

の底に何處までも他を含み私をして私たらしめる大なる自己と考へられるものは、單に深められ廣められた大なる自己といふ如きものではなくして、行為によつて私を限定する汝といふ如きものでなければならない。我々が自己自身の中に絶對の他を見るといふ時、それは深められ廣められた自覺を意味するものではなくして、自己自身を否定する意味を有つてゐなければならぬ。我々は自己自身を否定することによつて肯定するのである、死することによつて生きるのである。そこでは個物が個物を限定する、點から點に移ると考へられねばならぬ。それは時間的にして社会的・歴史的限定と考へられるものでなければならない。自己自身の中に絶對の他を見るといふ絶對無の自覺的限定と考へられるものが社会的・歴史的限定と考へられるものであり、我々の自己はかゝる意味に於て限定せられるのである。何處までも我々の自己の底に見られる深い非合理性と考へられるものは物質と考へられるものであり、何處までも自己の底に自己を基礎付けると考へられるものは汝といふ如きものでなければならない。自然の世界、イデヤの世界と考へられるものは歴史の世界の両面と考ふべきものである。歴史の世界に於てはゴッタルテンの云ふごとく、いつも私と汝と相逢ふのである、かゝる關係に於て歴史の世界が成り立つて居るのである (Gogarten, Ich glaube an den dreieinigen Gott, Kap.4)。

私があるといふことは歴史的に限定せられてゐなければならない。環境的限定を離れて個物といふものはない。歴史的限定を離れて自己といふものは考へられない。もしさういふものが考へられるなら

ば、それは抽象的自己たるに過ぎない。我々の自己の底深く見られる非合理性は歴史的な非合理性でなければならない。かゝる意味に於ては我々の自己は何處までも過去から限定せられて居ると考へられねばならない。併しそれが單なる過去からの限定と考へられた時自己といふものはない、それは「過ぎ去つた汝」でなければならぬ、我々の底に見られる絶對の他でなければならない、自己の底に見られた過去でなければならぬ。かういふ意味に於て我々の自己は歴史的に限定せられて居ると考へられるのである。これと共に、逆に我々は過去を單なる過去として見るのではなく、過ぎ去つた汝として過去を見ることによつて、眞の歴史が始まるといふことができる。單に過ぎ去つたものが歴史ではなく、歴史に於てはいつも過ぎ去つた汝と現在の私とが相逢ふのである。そこに絶對無の自覺的限定としての歴史の實在性があるのである。私が最初に環境が個物を限定し個物が環境を限定する辯證法的運動として歴史といふものを考へたのも、その根柢にかゝる意味がなければならない。無限の過去から私を限定すると考へられる環境的限定と考へられるものは、單なる環境的限定といふものではなくして、汝といふ意味を有つたものでなければならない。我々が自己自身の底に無限の過去を見、更に自己自身の底に於て未來から過去を限定すると考へ得るのも、否、時を否定すると考へ得るのも、自己に對するものが汝であるといふ意味からでなければならぬ。永遠の今の自己限定として時といふものが考へられると云ふにも、その底に私が汝を限定し汝が私を限定するといふ意味がなければならぬ。斯く

して瞬間から瞬間に移り行く時といふものも考へられるのである。我々が自己自身の底に絶対の他として汝を見るといふことから、時の限定が始まるのである。私の自己自身の底に見る絶対の他として汝と考へられるものは、無限の底から内面的に私を限定する無限の過去としての汝、即ち過ぎ去つた汝といふ如きものでなければならぬ。そこに無限の過去から現在を限定する時といふものが考へられる。かゝる意味に於て我々が絶対の汝から限定せられて居ると考へる時、そこに絶対時といふものも考へられるであらう、絶対の環境的限定といふものも考へられるであらう。併し私が私に於て汝を見ることによつて私であり、汝は汝に於て私を見ることによつて汝であるといふ人格的自己の自己限定に於て、瞬間が瞬間自身を限定し、瞬間から瞬間に移る眞の時といふものが考へられるのである。すべて具體的に有るものは、その根柢に於て右に云つた如き私と汝との關係によつて基礎付けられてゐなければならぬ。我々は普通に人格といふものを抽象的に考へるから、實在の底に人格的限定といふ如きものを考へることによつて、實在界が主観化せられ、抽象化せられると考へる。併し過去無限からの歴史的限定といふものを離れて、自己といふものはない。我々の底に絶対の他を見るといふ意味に於て、絶対の環境的限定に即して自己といふものが考へられるのである。私と汝とは唯歴史に於て相逢ふのである。而してそれは逆に私と汝と相逢ふことによつて、歴史が成立することを意味して居るのである。道徳的には我々は有限なる自己の中に無限の當為を蔵することによつて人格と考へられ、

宗教的には罪の意識なくして人格といふものは考へられないと言われる。併し我々の人格的自己は何故に斯く考へられねばならぬのであらうか。それは我々の自己自身の底に絶対の他を蔵するといふことを意味するに外ならない。自己自身の底に蔵する絶対の他と考へられるものが絶対の汝といふ意義を有するが故に、我々は自己の底に無限の責任を感じ、自己の存在そのものが罪惡と考へられなければならない。我々はいつも自己自身の底に深い不安と恐怖とを蔵し、自己意識が明となればなるほど、自己自身の罪を感じるのである。我々は自己自身の底に自然を蔵すると云つても、理性を蔵すると云つても、かゝる考は出て來ない。又自己自身の底に見る他と考へられるものが尚自己と考へられるかぎり、責任といふものは出て來ない。唯、私自身の底に汝を蔵しそれによつて私が私自身であるといふことから、私は私の存在そのものの底に無限の責任を有するのである。而もその汝は單に一般的なる抽象的汝であつてはならぬ、又歴史的と云つても單なる歴史的事實として了解の對象といふ如きものであつてもならぬ。それは私の底から私を限定する歴史的汝でなければならぬ、私は私の底に歴史的汝を見ることによつて私が私であるのである。フィヒテの非我と考へたものも、かゝる意味を有つた汝と考ふべきである。當為と云つても、單に抽象的な一般的當為といふものがあるのではなく、私が私の限定せられた歴史的位に於て、私に對するものを歴史的汝と見るによつて、眞の當為といふものが考へられるのである。かういふ意味に於てのみ實在の根柢に人格的なものを考へ、人格的な

るものの上に實在界が建てられると考へることができるのである。

私は嘗て愛の對象を人と考へることによつて、物を對象とする欲求と愛とを區別し、又眞の愛とエロスとを直別した。眞の愛といふのは何等かの價値の為に人を愛するのではなく、人の為に人を愛すると云ふことでなければならぬ。如何に貴き目的であっても、その為に人を愛すると考へられるならば、それは眞の愛ではない。眞の愛とは絶對の他に於て私を見るといふことでなければならぬ。そこには私が私自身に死することによって汝に於て生きるといふ意味がなければならぬ。自己自身の底に絶對の他を見ることによって、即ち汝を見ることによって、私が私であるといふ私の所謂絶對無の自覺と考へられるものは、その根柢に於て愛の意味がなければならぬ。私はキリスト教に於てアガペと考へられるものにかゝる意味があると思ふのである。アガペは憧憬ではなくして犠牲である、神の愛であつて人間の愛ではない、神から人間に下ることであつて人間から神へ上ることではない。シヨルツは *Die Mensschwerdung Gottes. In der Christuserscheinung. Und welch eine Menssschwerdung! Bis zum Tode am Kreuz. So manifestirt sich die Gottesliche.* と云つて居る(H. Scholz, *Eros und Caritas*, S. 49)。人間のアガペは神の愛の模倣と考へられる。而してアウグスチヌスが神の愛によつて私が私であるものであると云ふ如く、神の愛によつて私が眞の私であるのである。我々が單に自己の中に他を見ると考へる時、自己は欲求的と考へられ、かゝる自己の見る他と考へられるもの、即ち

その對象界と考へられるものは欲求の對象界と考へられる。併しかゝる欲求的自己と考へられるものも自己といふ意義を有するかぎり、それは自己自身の中に絶對の他を見るといふ意味を有つてみなければならない、而してその他は絶對の他として見られないものでなければならない。それで欲求的自己の立場に於てその對象界と考へられるものは、自己自身の手段となるものと然らざるものと、更に自己に反するものとに分れる。自己自身に於て他を見るといふことの逆に、他に於て自己を見るといふ意味に於ては、我々の自己は身體的と考へられねばならぬ、欲求的自己は身體的と考へられるのである。併しかういふ意味に於て他と考へられるものも、普通に考へられる如く自然といふ如きものではなくして既に歴史的他の意味を有ったものでなければならない。單なる自然から欲求的自己といふものも出て來ない。斯く考へられるかぎり、即ち他と考へられるものの底に自覺の意味があると考へられるかぎり、客觀的精神といふ如きものが考へられる。客觀的精神と考へられるものは、我々の自己に對して他と考へられると共に我々が之に於て自己を見出すと考へられるものである。我々は自己を他に没することによって生きると思ふのである。生物學的生命といふものを考へる時でも、既に自然と考へられるものに於て、かゝる意味を考へるのである。斯く客觀的精神と考へられるものに於て、他に没入することによって自己を見出すといふ意味があるとしても、尚眞に絶對の他に於て自己を見るといふことはできない。客觀的精神と考へられるものに於ては眞の個人的自己といふものは見

出されない。我々の根柢に自然といふものが考へられる時、個人的自己といふものの考へられないのは云ふまでもないが、客観的精神に於ても同様である。客観的精神と考へられるものに於ても、自然と考へられるものに於ても、自己と他との抽象的對立を免れることはできない、何處までも自他の單なる闘争の意義を脱することはできない。客観的精神と考へられるものは、一面に於て自己の中に絶對の他を見るといふ絶對無の自覺的限定の意義を有するとも考へられるが、何處迄も我々の個人的自己を包み之を内に限定すると云ふことができない。爾考へられるかぎり、それは却つて絶對無の自覺的限定によつて限定せられたものと云ふことができる、單に自己の中に他を見るといふ意義を極限まで押進めたものと見ることができる。超越我と考へられるものは、かゝる意味に於て自己の擴大に過ぎない、眞に絶對の他に於て自己を見るといふ意味を有さない。自然と考へられるものも、かゝる絶對無の自覺的限定によつて限定せられたものと考へることもできるのであらう。カント哲學に於ての如く、純我の綜合統一によつて自然が構成せられると考へることができる。併し自然はその背後に考へられる絶對の非合理性によつて、絶對に我々を否定する意義を有するかぎり、即ち絶對死の意義を有するかぎり、尚絶對無の自覺的否定的意義を有すると考へることもできるのである。客観的精神の自己限定の内容といふべきものは文化と考へられるものであらう。我々が自己自身の中に他を見、他によつて限定せられると考へられるかぎり、客観的精神と考へられるものが我々を包み我々を限定する

大なる自己として、我々はその目的を目的とし、我々はその自己實現の手段となるとも考へられるであらう。更に自己の底に自己自身を越えた絶對の他を見ると考へる時、宇宙的精神といふ如きものが考へられ、それがエロスの對象としてそれによつてエロスの限定といふ如きものも考へることができるであらう。併しそれは何處までも自己の底に他を見るといふ欲求的自己の立場を離れたものではない。従つてそれによつて自己自身の底に原罪を見、眞に死することによつて生きるといふ人格的自己を限定することはできない。客観的精神と考へられるものは、眞に我々の底から我々の自己をして自己たらしめる汝ではなくして、尚對立的に我々の外に見られる汝たるを免れない。唯、自己自身の底に絶對の他を見るといふことの逆に絶對の他に於て自己を見るといふ意味に於てのみ、眞に自己自身の底に原罪を蔵し、自己の存在そのものを罪とする人格的自己といふものが考へられるのである。そこにキリスト教の所謂アガベの意味がなければならぬ。絶對の他に於て自己を見るといふことによつて、自己擴大と反對の意味に於て自己の中に絶對の他を見ると云ひ得るのである。そしてそこに我々は眞に私が私であるものとなると云ひ得るのである。我々は理性なるが故に人格的自己であるのではない、況して單なる衝動によつて人格的自己であるのでもない。我々は神のアガベに倣うて私自身の如く隣人を愛することによつて人格的自己であるのである。愛は非合理的と云はれる、アガベも自發的とか没價値的とかと考へられる。併し單に非合理的衝動といふ如きものは愛ではない。愛は他に於

て自己を見ろといふことでなければならない。そこに人格的自己の意義があり、絶対無の限定として我々の實在界と考へるものをも基礎付ける意味があるのである。我々に価値あるが故にアガペの對象となるのではなもい、アガペによつて我々は価値を有つのである。ニグレンの云ふ如くアガペは価値創造の原理といふことができる(A. Nygren, Eros und Agape, S.61)。価値あるが故に神我を愛するのではなく、神我を愛するが故に、我は価値を有つのである。すべて客観的価値と考へられるものはアガペによつて基礎付けられねばならない。エロスとアガペとは固、相反する方向である。我々はエロスの方向に進むことによつて神に到ることはできない、何處まで行つても大なる自己を見るに過ぎない。そこから汝に對する義務とか責任とかいうものは出て來ない、自己が絶対者のために存し、絶対の価値に對して當為を有つといふ意味は出て來ない。併し環境が個物を限定し逆に個物が環境を限定するといふ辯證法的運動に於て眞の個物といふものが考へられる如く、我々が自己に於て絶対の他を見、逆に絶対の他に於て自己を見ろと考へられることによつて、我々の眞の人格的自己といふものが考へられるのである。單に他に於て自己を見ろと考へるならば、我と物と択ぶ所はない。神は何處までも我々の底から働くものでなければならない。外から働くものは盲目的力に過ぎない。我々是我々の底に超越を見るのである。それは矛盾であるかも知れない。併し眞に人格的自己と考へられるかゝる辯證法的運動としてあるのである。我々が自己の内に絶対の他を見ろと考へるかぎり、そこにエロスの

意義がなければならぬ。アガペの一面にエロスが含まれてゐなければならぬ。神は憧憬の對象とも考へられるのである。唯、我々はエロスによつて神を見ようと思へるならば、それは全く東に行こうとして西に向ふものと云はざるを得ない。エロスによつてアガペが基礎付けられるのではなく、アガペによつてエロスが基礎付けられるのである。我々の文化と考へるものは宗教によつて基礎付けられることによつて眞の文化の意義があるのである。アガペに基礎付けられない文化は遊戲に過ぎない。放蕩息子や葡萄園における労働者の譬喩がアガペの意義を明にするものと考へられるのは云ふまでもなく、アガペには何らの價值的考量が加つてはならぬ。併しかゝる意味におけるアガペは価値超越を意味するものであつて、価値否定を意味するものでない。主語となつて述語とならないヒポケーメノン(隠れたもの)は述語的に限定することはできぬ。併しそれは何處までも述語化せらるべきものである。我々は唯、歴史を通じて神と語るのである。我々の底から我々を限定する絶対の他と考へられるものは、歴史的限定の意義を有つたものでなければならない。神は歴史の底に自己自身を啓示するのである。斯く云ふも歴史の根柢に価値概念を置こうといふのではない、歴史を合目的的に考へようと思ふのではない。爾考へることは歴史を否定することである、歴史をイデヤ化することである、歴史の底には絶対の非合理性がなければならぬ。而もそれは單なる非合理性といふべきものではなくして、汝といふ意義を有するものであり、限定するものなきものの限定として、そこに時が始まるといふ意味がなければなら

ぬ。そこには無から有が始まるといふ意味に於て創造の意義がなければならぬ、価値もそこから創造せられるのである。歴史は価値に従つて作られるのでなく、価値も歴史的に創造せられるのである。我々が歴史を通じて神に接するといふ所に、価値創造の意味がなければならない。我々は歴史に於て歴史によつて限定せられたものである。この歴史的限定を離れて我々の個人的自己と抽象的に相接する神といふものが考へられるならば、即ち單に超越的神といふものが考へられるならば、それは眞の神といふべきものではない。汝自身の如くに汝の隣人を愛せよといふも、そこに感傷的意義があつてはならぬ、もし毫釐もさういふ意味があつたならば、それはアガペといふべきものではない。故にアガペに於ては人を愛するのでなく、神の愛を通じて人を愛すると考へられるのである。私と汝とは同じく歴史に於てあり、歴史によつて限定せられたものとして、神の創造物である。私は神の創造物として私自身の如く、神の創造物としての汝を愛するのである。私と汝とがアガペに於てあるといふことは、私と汝とが神の創造物として歴史的世界に於てある意味を有つてみなければならない。

(昭和七年〔一九三二〕七月)